奥州安達原

第一

時は康平五つの年、後朱雀院の朝に當つて、東夷猥に逆威を振ひ、王命に背き奉るといへども、源氏の武功に切靡け、再び治る時津風、八幡太郎義家公、武威磨ぎ立つる鎌倉御所、暫く鋭氣を養はる。頃は如月半の空、都より勅使下向有りければ、早門出の日も近づき、取傳へたる梓弓、箭叫の音勢子の聲、さも嚴重に見えにける。宮居間近く假屋を構へ、八幡太郎義家朝臣、執權鎌倉の權頭景成、瓜割四郎糺、威儀を守つて扣ゆれば、上座には勅使大江大將維時、冠の紐の長き日も、早西山にかたむきぬ。維時義家に打向ひ、「此度某罷下る、勅使の趣餘の儀にあらず。中宮御產の御祈、此度の大赦に付き、奥州の流人、桂の中納言則國召しかへすべしとの勅諚。奥州は源氏の任國、義家宜しく沙汰すべしとの御事なり」と述べらるゝ。義家ハット領掌有り、「中納言則國事は、聊の科によつて、父頼義が任國の砌、奥州松が浦へ流され今に存命。此度赦免の下書、義家計ひ奉らん」と、勅答有れば、「コレサ義家、流人の事は下狀を以て事は

足る。御邊は是より直に上洛、十握の御劍も今において行方知れず。かほどの大事を餘所にし悠々と在國し、鹿狩山狩に日を送るは君への不忠。但し所存有つての事か」と、何がな横を蟹公家の、爪を隱せし奸佞邪智。「コハ維時の仰とも覺えず、雲上には月花の御翫武士の狩漁は軍のかけ引、軍慮忘れぬ武士共が、未熟の手ずさみ御意に入つて祝著」と、一句の答へに返答も、何がなとへらず口、「いか樣音に聞えし貞任宗任、鬼神をも欺く曲者、敵に取つてはこは者〳〵。隨分と稽古して、敵の首よりこつちの首の、用心が肝要ならん」と、權威をかさに嘲弄す。こらへかねて權頭、憚もなく進出で、「勅使と敬ひ差扣へ罷在れば餘りしき御一言、先年栗坂の其一戰、小勢を以て大敵の逆徒の張本、頼時を討取つたる其日の軍、勝に乘つて追打せざるは軍の法、彼六韜の誡御存知有つての御批判か。サア御返答承らん」と、詰かくれば瓜割四郎、「ヤア權頭、高官に對して不禮の過言、扣へ召され」と、維時に詔ふ奸曲、義家それと左右を制し、「維時公の御批判も、武勇を勵ず御計武の憤に其身を忘るゝ景成が過言、何條賢慮にかけらるべき」と、事を治むる明智の詞。かゝる所へ小林の鄕民共、折に籠めたる鶴十番、御前に差置き、中にも庄官とおぼしき男、假屋間近く頭を下げ、「此鶴日毎に小林の宮居近くおり候故、所の者追ひ候へども少しも恐れず、飼鳥と存ずれども、下々の勝手に悪い大鳥。夫故村中が寄合

付け、相談の上殿樣へ御獻上、宜しく御上の御取次頼上ぐる」と、いひ捨て御前を立歸る。義家甚御悅喜有り、「誠に鶴は仙家の靈鳥、我先祖六孫王東夷征伐の其折から、此所にて雌雄の鶴を得給ひ、源氏の武威千歲の後まで輝くべき印なりと、此小林の岡に放し、所を直に鶴が岡と名付け給ふ。時といひ所といひ旁めでたき家の吉瑞。六孫王の古例に任せ、八幡太郎義家是を放つと、金の札を付け、此所に放し置き、八幡宮の神鳥と、普く天下に觸れ流し、神慮を仰ぎ奉らん」と、惠も深き御上意に、皆々あつと感入る。景成遙の梢を見渡し、「アヽラ心得ず、歸雁行を亂る時は伏兵有りとの兵書の禁。シャ曲者ござんなれ」と、立上れば御大將、「ホヽウよくも咎めし權頭、鎌倉の留守を預ける汝、其心がけを見よう爲のわが計。伏勢ならず」と扇をひらき、招かせ給へば茂みより、顯はれ出づるは此度の、御供に隨ふ勇士のめん〳〵、皆坂東に譽の弓取、秩父の十郎伴の助兼、縣の次郎、其外譜代恩顧の武士、早御立と白幡に、靡き隨ふ源氏の威勢、朽ちせぬ黃金の鶴が岡、都をさしてぞ　三重行く空の、何事も春は吉田の神社、百さへづりの宮雀、八百や萬の鳥の音も、賑ふ神の誓かや。參り下向もおほき中、人目にそれと、襠は、九條の里の戀絹とて、廓に名有る全盛の、松の位の太夫職、二世と兼ねたる戀中の、生駒之助に添ひたやと、歩を運ぶぞ殊勝なり。禿の市彌不審顏、「申し太夫さんえ、けふは生駒之

助様に逢ひに行くとおしやんして、來て見たりや吉田で有つた。コリヤ狐がつまみはせんか」と、いへばにつこと打笑ひ、「サイノ、久しう便も遠ざかり、案じもあらたな神の利生、大そうな願蔘り、近いと思へど餘程の道、定めてそなたもしんどかろ」と、いふ向より先拂ひ、遠目にそれと遏は太夫、「アレ市彌、そなたが常住拜みたがる生きた雛様、傍では無禮」と花のかげ、舍人がきしらす御車は、當今の御弟君環の宮、まだ振袖の莟から、役目も重き匣の内侍、附々賑ふ花の本、爭ふ女中の袖袂、御機嫌斜ならざりし。馬場先の方よりも、歩み來る若侍、武將八幡太郎義家の近習、志賀崎生駒之助英、夫と見るより遙に飛去り頭を下げ、「御忍びの行幸とは申しながら、大切なる君の御物詣、主人義家某に申し付け、餘所ながら御車の御供」と、言上すれば匣の内侍、「オウ遏は天下の武將と呼るゝ程有つて、道を守る義家の心遣ひ、宮様にも嘸感。殊更長閑な春の氣色、お氣慰のけふのお供。物堅き直方殿、是非御供と有つたれど、どうやらかうやら御所のお留守を」「いかにも〳〵、大切なる御所と申し、四角四面な直方殿、御遊興の御供には、花も紅葉もくすぼりかへる。ア、何がな宮様のお慰を」と、見やる木蔭に鶯の首、覗いて見たり引つこんだり、招くをばなのはなの先、冷汗かくとも知らざる女中。匣はそれと見て取つて、「コリヤ供の者共、宮様にも異ない御機嫌、今暫くお隙がいろ。お迎は入相

の花ちる比、早う〳〵」に雜色仕丁、殘らず打連れ立歸る。生駒は此場をくろめんと、眞顏になつて、「アレ〳〵〳〵女中樣御らうじませ、御所方には珍らしい遊君と申すもの、御覽じた事ございますまい」と、いふに內侍が、「何遊君とや、江口の君のうかれめと、古今集では見たれども、直に見るは今が初め、サア〳〵早う」に生駒之助、してやつたりと一人笑、「彼太夫めが揚屋入りの道中を、今爰へ取寄せてお目の正月させません。それ〳〵そこへ、もう此處へ」と晌仕形を戀絹が、かい取小づま八文字、唄よるべ定めぬ流の身にも、すいた男の有ればこそ、すかいで是が勤まろか。ア、くだばかり、と生駒が傍、寄らんとするを目と仕形、寄るなとしらせど、「オ、しんき。けふお前と連立つて、此吉田で飲み明かすとさつきにから」と、膝に取付きあまえ泣。こたへ兼ねたる辛抱袋、破れかぶれと生駒がやくたい。二人がそぶりを女中達、「コレ生駒殿、あの傾城はそなたの相方とやらいふ物か」と、いはれて惱り心付き、「ハテ扨めつさうな仰、物堅き八幡が家來、廓遊びは夢にも存ぜぬ」「ム、そんなら今のは」「ハテ客を捕まへて此樣にするが傾城の仕打、そこで客めがたはいになつて、可愛い色を引寄せて、コレ此樣に」と抱きしめれば、「コレ志賀さん、らつちもない事隙入れずと、サアござんせ」と手を取れば、「ソレソレ〳〵、どうでもそなたの馴染ぢや」と、睨め上げられて生駒之助、「エ、近付きでもないく

せに、いろ〳〵の事ぬかす故、あなた方への言ひわけなし」「イヤお前がわしに」と又取付き、兩手をぢつと引きしめて、かうした所が廓の口舌、まづあら方はこんなもの」と口から出次第言ひ次第、取付き引付く向ふより、歩み來る瓜割四郎、朱鞘の大小いかつけに、それと見るより强腹ながら、「ヤア生駒殿、主人義家大切なる急用有り、早う〳〵」の聲に恟り飛退いて、「急御用とは覺束なし、貴殿樣子を聞かずや」と、立寄る生駒を突飛ばし、「大切なる役目を受け、夫に何ぞや女を捕へ見苦しき振舞。何かは御用も我等は知らぬ、早おいきやれ」とねめ廻す。戀絹生駒は目を見合せ、道理に詫方なけ首し、心殘して立歸る。續いて立つ戀絹を、四郎が留て、「コレ戀主、エ、われは〳〵、首だけ惚れてゐる四郎、ふつてふつてふり付け、生駒にばつかりきつい乘り樣、胴欲ぢやぞよ。エ、爰な命取め」としがみ付く。ふり放して逃げ行くを、どつこいならぬと又取付く。「ア、これ申し、どうぞ往なして、拜みます」「イヤ〳〵〳〵、拜むのはこつちから」と、詫方なんぎの最中へ、「鳥をさいた見さいな、さい鳥さいた見さいな」何にも得とらず餌差竿、物見だけい女中達、「ソレ〳〵宮のお慰、四郎とやら、其鳥差此所へよびや、四郎四郎」に、「ハア、、、、鳥差お召しぢや、うせをれ」と、いふ間をはづして戀絹が、逃げ行く跡に「なむ三寶、大事の鳥を飛ばしてのけた。鳥差め覺えてをれ」と、つぶやき跡を慕ひ行く。鳥差は

立寄つて、餌竿をおろししやに構へ、「一つひよ鳥ひえの山の、二つ梟二子の山に、三つ木兎都鳥」そこよかしこと立まふふりにて、匣の袖へ投げ文を、「ひら〳〵ひらの檜木の枝」とそらさぬ風情。文取上げて匣の内侍、「ハテいぶかしき賤の振舞、御前に叶はぬあつちへやりや」と、文投げ捨つれば女中達、「下々の身分で内侍様に付文とは、大それた慮外者、早立つて行け〳〵」と、せり立てられてもびくともせず、下々で有らうが何で有らうが、戀に上下の隔はない。但し又鳥差が上つがたに、惚れる事はならぬといふお觸でも有つたか。何でも思ひ込んだ此男、返事聞かねばいつかな〳〵」と、人目遠慮もあらくれ男、「アレ狼藉者、誰ぞ參れ」と、呼べどをりあふ人もなく、隔つる女中をはり退けぶち退け、傍若無人の狼藉に、内侍は宮様かひ〳〵しく、「なう〳〵こはや」と局達、神前さして逃げ行くを、「おのれ女め、一摑と」大手を廣げ逸散に、跡を慕うて追うて行く。内侍は宮をいざなひて、つまづき轉び出で給ふ。跡からいつさんかけくる鳥差、「内侍様、まんまと首尾よう參りました。様子は今の文の通り。早う〳〵とせき立つれば、匣は宮を伴ひて、何いふ隙もあらしに連れ、何國ともなく落ちて行く。かくとは知らぬ女中達、おろ〳〵目にて走り出で、「コリヤ〳〵鳥差、宮様どつちへ連れいた」と、すがり付くを踏飛し、「ヤア宮が見えねば身が知らうか。そこ退け通せ」「イヤ〳〵〳〵、そなたが連れいた宮様

を、こつちへ戻しや」「イヽヤ知らぬ」「イヤそなたが」と爭ふ半、傔杖直方御歸館遲しとかけ來る松かけ、樣子を斯くとかけ寄つて、烏差が左の脇つぼ、丁ど入れたる霞の當身、「コレ〳〵コレ、宮樣はいづくにおはする、匣殿は、内侍は」と、問ふもいら立つ、こなたもうろ〳〵、「あの烏差が狼藉故、宮樣伴ひ匣樣はあの道へ」と、いふ間もわく〳〵せくかけ行く女中。「扨こそ曲者吐かして聞かん」と又一當、むつくと起きる間稻妻の、懷劍咽につき立てたり。なむ三寶詮議の種、ヘツエしなしたり」と氣は夕陽、車輪のごとくかけ廻り、さも有れいかにと死骸の懷中、手を差入れて引き出す一通、さつと披いて讀下し、「何々、環の宮を盜出し給はるべしと、匣の内侍へ賴の狀。何者とも名を記さぬは、朝廷にはびこる佞人、大江の維時なんどがしわざか。何にもせよ、逆臣に出しぬかれしか。エヽ口惜しやさりながら、是こそは詮議の手がかり」究竟一通懷に、しつかと納むる忠臣の、心の闇の道筋を、いつさんにこそ　三重歸りけれ。西洞院左女牛の殿造、八幡太郎義家朝臣、再鎭守府將軍に御拜任の御悅びとて、在京の大小名、思ひ思ひの御獻上、餝る口上使者袴、奏者の女中が受答、花をちらして持運ぶ、鬧しい中ちらほらと、一つ小蔭に寄りつどひ、「葉櫻樣、何と御家中も多い中、よい男といふは生駒之助樣、かはいらしい殿御ぢやないか」と、いへばみはしが、「サイナウ、したが顏に似合はぬ物堅さ、其顏

に似合はぬで思ひ出した。茶の間の楓があの顔で、生駒様を付けつ廻しつ。何と身の程知らずぢやないかいの」と、譏る後へによつと出た、頬はすもゝの花楓、櫛笥鏡臺携へて、「オヽ皆様聞いておくれ。わしが此様に思ふのに、生駒様の聞入れのないはどうした事と思うたりや、あのお方は傾城ずきで、こちらが様な大むくは嫌ひ。夫でわしも今から派出に身を持つて、生駒様に思はれうと、コレおぐし上げの磯野を頼み、結うて貰うた此釣舟、似合うたか見ておくれ」と、いふ目付のしたゝるさ。こらへ兼ねて吹出す口の間より、御家人瓜割四郎糺、袴の角菱いがんだ頬付、「ヤア何ざは〳〵とめらう共、ヤうぬは楓め、エ、悪ぐさいやつ。こりやお玄關近く、女の手道具見苦しい。ばか者め」と、蹴飛ばかされて散亂粉灰、皆々次へ逃げて入る。「ヤア面倒な此手道具、持つてうせぬか。誰そ取つて捨てよ」と、呼ばはり〳〵奥へ入る。御門の方さわがしく、「出をらう〳〵」と下部が聲、様子は何かしら洲先、かいどり小づま八文字。「ヤア女め待て。御家中に見馴れぬ風俗胡亂やつ。サア名をぬかせ、聞かねばいつかな」「ホヽヽヽヽホヽ、合點が行かぬの聞かねばならぬのと、無理な客様の色事をせかんす様に」「ヤア扨は儕ばいたよな。此所をどこだと思ふ、忝くも八幡様の御屋敷。サア出をらう」と引立つる。「オヽ無粋、人の心も知らずに、其様に呵らんすものぢやない。其八幡様の御家來、生駒之助様に逢はね

ばならぬ譯有つて。コレよいお人ぢや、誰やらおもてへ逢ひに來てゐると、ちよつとあの樣をここへ呼出して下さんせ。ホンニ又此生駒樣も、何して居さんす事ぢややら、早う逢ひたい、出て下んせぬ事かいの。エ、しんきや」と式臺に、身を投げ島田するせんの、流ははでに顯はれり。「ヤア情のこはい下司女、意地ばらば薪ざつぱ」とひしめく聲、何事やらんと立出づる、志賀崎生駒之助、一間をずつと顏見て惚り、やにはに庭へ飛石の、堅い顏付氣色をかへ、「ヤア下郎共、御座の間近く尾籠の高聲」「ハイヤ此女め、胡亂者故引抑へて」「ヤア生ぬるい、わいらで行かぬ身が詮議する。早く下れ、何馬鹿やつ」と、呵りちらして追立てやり、邊を見廻しつゝと寄り、「コレ戀絹嗜め。コリヤマア何事、物堅きお館の格知つて居ながら、はでな姿で晝日中、お上へ聞えたら、生駒之助は痛い腹。サア人の見ぬ内に早く〳〵」と、いふ間も若しやと胸どき〳〵、せく男よりせき入る戀絹、「コレ生駒樣、ひよんな事が出來てきた、夫でお前に逢ひたさに」「ヤアヤアなんぢや。ひよんな事とは氣がかり、其譯をサア早く」「サアイナ、其譯といふは、客は誰か知らねども、わしに合點もさせず身請の相談、親方買に手附まで受取つたと、聞くとはつたりコレ此つかへ。どうかかうかと案じる折から、駈落してこいとお前のしらせ」「ヤア〳〵ヤアヤアそりや誰が」「四郎樣が」「ヤア何あの瓜割四郎がさういうたを、誠と思うて、スリヤそち

は廓を」「アイ駈落してきたはいな」「ホイ」はつと許に生駒が當惑。「ハテ合點の行かぬ、というてゐる間も其方の此形、人が知つては一大事、どうぞ隱して置く所を」エ、どうせうぞかう障子、明ける物音出る楓、見付けられじと鬱絹を、こかげへ押しやりそらさぬ顏。楓は其儘すがり付き、「エ、氣の惡い生駒さん、今のしだらはどうぞいな。あの子ばかりが眞實で、惚れぬいてゐる此わしは、うそにいとしと思ふかと、見捨てられたもあの子故。アノ傾城と譯有る事、今の樣子も書置きして、私やいつそ死ぬ覺悟」と、用意の剃刀、生駒は驚き、「マア待つた死ぬるとは、短氣千萬。そしてアノ傾城と身共が譯を、書置にしてよいものか」と、留める兩手をじつとしめ、「さういはんすは叶へて給はる心かえ」「でも夫は」「そんなら死ぬる。イヤ放した」と聲高に、こまつて詮方なんぎの手詰、「そんなら應ぢや」「エ、嬉しや」と抱付かれ、顏を背ける生駒が思ひ、生ぐさ坊主が精進の、馳走に禮いふ心地なり。折もこそ有れ、お客のお入とのゝめく聲、何がな幸ひ、「コレ〳〵、お客のお出」と引つぱづして逃行く生駒、「コレ志賀さん、夫婦のかためはわしが部屋、必待つて居るぞえ」と、尻ふりちらして走り行く。程もなくのつさ〳〵、入來る權威の鼻、大江大將維時、打紐したる白木の箱、雜掌笠原軍記に持たせ、傍見廻し聲をひそめ、「汝も兼て知る如く、年來の我大望、青公家原は大半味方になすといへども、只手ごはきは、

八幡太郎義家、平の傳杖直方、きやつら兩人禁廷にへちまへば、何かと手延無念至極。何卒罪に落さんと肺肝を廻らし、なんなく直方は術の網に打込み、けふ中に仕舞ふ合點。此上は義家一人、彼が家來瓜割四郎、我味方に付けたれば、十が九つ大望成就。只儘ならぬは戀といふ曲者、義家が女房敷妙、いろ〳〵と心を盡せど、今に色よき返事もせぬ。何でもけふは此艶書を、合點か」と、渡せば取つて懷中し、「今日中に御手に入れん」「必ぬかるな」「合點」と、欲と色との間の襖、出向ふ瓜割四郎維時が傍近く、「お賴の通り生駒之助しくじらす術上首尾、きやつがなじみの傾城を此館へ引入れ、それを越度に打殺せば、風の神で戀の敵、戀絹を我女房に」と、いふもぞく〳〵。「でかしたく〳〵、さい先よし。艶書の事を、軍記合點か。瓜割必仕損ずな」と、二人を立たする間もなく、さと打ちかをる絹の香は、義家の奥方敷妙御前、襠姿もしとやかに、「維時公には御苦勞の御出、夫義家早速お目にかゝる筈なれども、今日は非常の大赦、何かと取込み罷在る、無禮の段は眞平お赦し、御用の品も有らば私に」と、聞いて維時威儀繕ひ、「ヤ義家の御内證、此比は打ちたえ申した。其元の親父直方には、御預の環の宮行方なく、老人の心づかひ、そこにも親の事なれば嘸案じ召されう。それは格別、某けふ罷越す事別儀ならず、義家には近々東國へ進發、門出を祝はん爲、維時が寸志の音物、改めて受納有れ」と、件

の太刀箱さし置けば、「是は〳〵何から何まで御深切の御詞、殊に夫が門出を御祝ひとは、義家にも嘸悦び」と、蓋押し明くればこはいかに、切柄したる荒身の刀、惜りさすがは武將の妻、さあらぬ體に取上げて、「武士の門出に打物とは、御心の付きし御音物、去ながら、是は正しく科人をためす不祥の刀」と、いふをおさへて、「コレサ敷妙、心を籠めし我音物、婦人が聞いて何を判斷、義家に見すれば胸に覺えの有る事さ。とつくりと思案をして、其刀の返答を相待つと、某が申すといはれよ奥方」と、割つて言はざる切柄は、いか樣子細あら身の刀、鞘にしつくり納めても、心のときつき納らぬ、氣を取り直し、「姫ごぜのちゑに及ばぬ事、義家に右の品、お出の樣子も申し聞けん。役目濟むまで暫の内は」「チヽサ〳〵、其刀の返答聞き切るまでは歸らぬ維時、案内召され」と權柄押柄敷妙に、打ちつれ一間へ入りにける。口の間より奏者の女中、「生駒樣々々々」と呼びつぐ聲。「生駒之助是に在り、何用なるぞ」と立ちいづれば、「申し、あなたにお目にかゝらうと、九條の里のくつわとやらいふ者が」「ヤァくつわが來たか、コリャたまらぬ。我等が逢つては事むづかし、こなた衆賴む、コレかう〳〵」と耳に口、こかげに有りあふくしけ鏡臺、抱かへて奥へはづし行く。程なく白洲へ小腰をかゞめ、「ハイ私は九條のけいせい屋文字屋の友三、是なは請人の惣助でござります。私抱の奉公人戀絹と申す女、去る方へ

身請極まり、手附まで請取りました處に、夜前廓を駈落ち、何が方々と尋ねますれども、とんと行方が知れませぬ。察する處戀絹が深間といふは、是の御家中生駒之助樣、身請を嫌うて廓を出たからは、外へは參らぬ此お屋敷に」「ア、コレ〳〵、こゝは殿樣のお白洲先、麁相な事など申上げたら」「ア、申しおつしやるな、お前方は素人、慮外ながら文字の友三というて、ずんど黑い男」「ソレ〳〵、此惣助も身晴、何ぢや有らうと生駒樣に逢うてのおりのり、又逢はしやれぬがさいご、奥へ踏込み直々に」と、口を揃へるくつわがゆすり。一間の内に大音上げ、「ヤアヤア八幡太郎是にあり、汝等下々の分として、上を恐れぬ推參者、引つくゝつて牢へ打ち込む、覺悟しをれ」とかさ高に、襖ぐわつたり立てゐぼし、大紋くわつと目の中の、きよろ〳〵するも思ひなし。威に恐れてとんぼう返り、お赦し御免と後じさり。よわい所へ附込んで、「ヤア一寸も動きをるまい、返答が悪いと首が飛ぶも知れぬぞ。思へば〳〵につくいやつ、傾城も同じ女、かはいさうにいやな男に身請とは、汝等が身がつ手、すいた男に添してやるか」「ハア、ハア」「そんなら赦してこます、あのごくだうめが」と、强う見せたる足拍子、はずみにすつぽり立ゐぼし、結びめ解けて櫛拂の、頬髭落つれば傍邊、ハツト生駒が取りのぼす、顔のゐのぐも汗たらぐ、所斑の八幡大名、俄にしよげる顔を見て、「ヤアこなたは、生駒之助」といはれ

て、「なむ三しくじつた」と、天窗抱へて逃げ入れば、「ヤア大騙の生駒之助、金の代に連れていんで、廓の法の桶伏」、と かけ入らんとする一間より、「両人扣へよ、先待て」と、立出で給ふは、義家の妹君、名も八重幡の九重に、花もおさるゝ品形、「コレそこなくつわとやら、其様に詞をあらし、若も此事兄義家様のお聞きに立たば、そち達が身の上、生駒之助とても同じ事、そこを思うて留に出たは 自 が情。なんと其戀絹とやらが身の代を辨へなば、そち達に言分は有るまいがの」「何が扨お金さへ受取りますれば」「そんならば其傾城、自が身受けした。夫持つて早歸れ」と、寢耳へ水の山吹より、花も實も有る取捌、「コハ忝し有がたし」と、戴きいさみくつわやは、九條をさして立歸る。生駒はめんぼくなか敷居、出るも出られぬ此場の品、戀絹は一間より、姫の情の有りがたさ、出づるもおもて伏し沈む。八重幡はしとやかに、「姫ごぜは相身互、何の禮に及ぶ事。かうして世話をする身にも、心に任せぬ憂き思ひ、物剛れしそもじを便、力に成つて」と計にて、思ひ入りたる御風情。「アノお姫様の改つた、大恩受けた此身の上、お心に叶はぬ事あらば何なりと、サアおつしやれ、どうぞいな」と、いはれていとゞ恥しさ、「思ひ初めたる戀人に、千束の數は重なれど」「モウおつしやるな、よめました。戀の手管は勤の道、私がかう申すからはお心づよう思召せ。シテ其惚れてござんす殿御といふは、お公家様かお大名

か」「イ、ヤ大名でなし公家でなし、そもじの剛染の生駒之助」と、聞いて恟り差しあたる、恩と情にからめられ、今更何と思案さへ、壁に生駒が聞くぞとも、思ひ極めて傍に寄り、「二人が譯を御存じの上、私へのお頼は、よく〳〵せつないあなたの戀路、切るに切られぬ中なれど、いつそとんと思ひ切つて、私がお世話致しませう」と、いふをこちらに立聞いて、おれを思ひ切つたとは、うそか誠かとやかくと、氣はもめくさの袴に汗。姫はいそ〳〵嬉顏、「わりない無心此上は、只よい樣に」と袖口に、紅葉かざして入り給ふ。かけ見るや見ずつか〳〵〳〵、胸ぐら取つて、「コリヤ戀絹、エ、汝はなア、イヤモ見さげ果てた根性。さういふ心とは知らず、つもられたが殘念な」と、引いつ迴しつ打ちたよく、手に取付いて、「ヲ、よういうて下んした、女房ぢやと思はしやんすりやこそ、打ちもさしやんす擲きもさんす。お前の樣な眞實な殿御が、又と世界にあろかいな。身請して貰うた義理にせまり、今の樣に姫君樣にいうたれど、お顏を見たれば退きとむない、やつぱり元の夫婦ぢや」と、男の膝にすがり泣く、わりなき有樣立聞く八重幡、悋氣の中にも二人が心、思ひやる方あら氣の生駒、「エ、いやらしい退いてくれ。心底のくさつた女、顏を見るもけがらはしい。大方おれがやつた誓紙も、身仕舞部屋のすき紙、油くさい狐わな、よい加減につまんで貰を」と、ついと立つを、「待たしやんせ、又かん

しやくの悪がうか。そも突出しの其日より、いひかはした互の誓紙、肌身離さず此守に、コレ見さんせ」と取出せば、「ィヤ〳〵まだ其守の中に何やら有る」「エ、疑の深いお方、是はわしがとゝ様の筐、大事にかけねばならぬ物」「マア其大事がるが合點が行かぬ」と、引つたくつて、「隱し男様のせいしの文言、ドレ拜まうか。何ぢや、奥州六郡の主安倍太夫頼時、法名大了院殿喜山大居士」と讀みもをはらず、「コレ戀絹、スリヤ此頼時といふは」「アイ私がとゝ様でございます」と、聞いて恟り、一間に立聞く義家公、猶も窺ひおはします。生駒之助つゝと立ち、「縁は是まで、戀絹」と、思ひがけなき夫の詞、縋り付くを振放し、「添はれぬ譯は其書いた物、頼時が娘と有れば、朝敵貞任宗任が兄弟。知らぬ昔は是非もなし、源氏に仕ふる生駒之助、朝敵の血筋につながつては、主君へ不忠武門の穢」と、いはれていらへも涙ぐみ、「けふまで包みし我身の系圖、とゝ様はくり坂の合戰に、流矢にてあへなき御最期、兄様達も皆ちり〴〵。行方定めぬうき勤、不圖馴初めし二人が中、起請誓紙を忠義にかへ、縁を切るとのお詞を、無理とはさら〳〵思はねど、お前に別れてそもやそも、此身は何となるぞいな。エ、死なしやんしたとゝ様も聞えぬ。兄様達も兄様達、よいかげんに朝敵もやめにしたがよい。お前の様な男と敵味方になる様な、鈍な軍が有るものか。私が縁の邪魔になる兄様達、こつちから縁切る程に、

コレかんにんして下さんせ。エヽなあ申しコレ申し」と、くどき嘆くぞいぢらしき。始終をとつくと義家公、一間をさつと押し明くる、音に二人は消え入る雪、とけぬ此場を逃げて入る。大將端近く出でさせ給ひ、「ヤァ〳〵誰か有る、召しかへせし流人ども殘らず是へ」の詞の内、ばら〳〵出づる歸洛の流人、籠を出でたるいさみ足。瓜割四郎御前に向ひ、「常磐島はだか島竹の浦松が浦、いづれも奥州一國の流人、都合二十七人相揃ひ候。ヤァ〳〵汝等謹んで承れ。此度非常の大赦行はれ、國々の流人赦免有る。さるによつて、奥州一國の流人は、我君へ仰下り、召し返したる汝等、有りがたく存じ奉り、何國へなりとも立退くべし」と、上意にはつと流人共、悦ぶ聲は叫喚の、地獄で佛に逢ひたるごとく、拜みつ轉びつ出でて行く。跡へしをを立出づる、是も流人としらすのさき、なりも形もしよげ鳥の、身すぼらしげにうづくまる。義家遙に見やり給ひ、「奥州の流人則氏とは御身よな、早速の入洛此上なし」と、仰に流人謹んで、「親にて候則國、勅勘を蒙り奉り、流人となりし其比は、我いまだ弱冠、成長するに隨ひ、父諸共昔をこふる憂き年月、海人の苫屋の煙と俱に、父は空しく相果てて、生きたるかひもあら磯の、島守にて朽ちなん身の、召し返さるゝは大君の御恵、偏に武將のお情」と、低頭平身なしければ、「なに父の卿には空しく成り給ひしとや。是非もなしさりながら、今日歸洛の

此上は、父則國の本官を直に、桂中納言敎氏卿、いざまづ是へ。誰そ御裝束參らせよ」ハツト女中が取々に、木綿の島守引きかへて、冠裝束花やかに、忽雲の上人の、威も備はつて見え給ふ。「其裝束を召さるれば、貴公は高官、武官の某憚有り」と、上座に進め給ふにぞ、「コハ痛み入る御禮儀。今までは天下の流人、今よりは朝家の近臣、百官百司に列る上は、所存を包むは君への不忠、天下の武將義家に、桂中納言敎氏が、三ケ條の不審有り、まづ第一には、三種の神器の其一つ十握の御劍、先年より紛失し御行方知れさせ給はず、禁門の外は武將の守る所、天照神より傳はりし御寶、草をわけ地を穿つてもなぜ詮議しめされぬ。第二には環の宮、御行方ましまさず、是なんどは朝廷の御大事、察する處、都間近く叛逆謀叛の族が所爲と、鏡にかけて顯れたり。さすれば奪はれし直方に、其疑なきにしもあらず。直方は御邊が舅と聞き及ぶ、緣に引かれてゆるかせに指置くなんど、世の人口はふさがれまじ。此三つの返答聞かまほし」と有りければ、「ハツア遺は文道に名を得給ひし桂中納言敎氏卿、御尤の御不審、一々承知仕る。併し此御返答は義家存ずる旨有れば、參内の折を以て」「いかにも、然らば再會々々」「おさらば」と、見送る式臺別れの禮儀、袂も匂ふ初冠、大内さして歸らるゝ。大將維時一間を立出で、「最前數妙に渡し置く刀の返答、いはずと胸に覺が有らう。舅直方が誤り、一家とて容

赦はなるまい。首討つて渡されよ」「イヤさうは罷りならぬ。環の宮を奪はれしは、一應の越度ばかりでない。大切の詮議有る直方、かるゞしく首討たば、宮の詮議は何を以て仕らん。ちと御龕相に存ずる」と、やり込められて負けぬ顔、「左程拔目なき義家が、家來の不義はなぜ詮議せぬ。ソレ軍記」「承はる」と笠原が、引立て出づる戀絹生駒。「何と見られしか、主の屋敷へ傾城を引入れる放埒侍、我家の事さへ得知らぬ御邊、天下の武將心元ない。是でも見事大切の詮議をするか義家」と、何がな惡口嘲弄も、理の當然にさしもの大將、拔差ならぬ此場の時宜、二人をはつたと蹴落し給へば、身の誤りに詞なく、白洲に頭を埋み居る。「ヤア〳〵敷妙、最前の切柄の刀持參せよ、早く〳〵」と詞の下、夫の心はしら鞘の、「此刀は何の御用」「ヲ、不義者めを成敗する」「エ、」「不便ながら武將の役目」「ヲ、さうなうては濟むまい」と、嘲る軍記が眞向なし割、二つに成つてのたれふす。「ヤア笠原には何科有つて」「サレバこやつ大不義者、御覽なされ、有らう事か、女房敷妙にかやうの艶書、傾城狂ひは時の興、强不義とも申されず、主有る女に不義しかけるは、畜生と申さうか。成敗したが誤りか。科の吟味立すると、どこへとばしりがかゝらうやら、それともに御不審あらば、承らん」と和かに、肝のたばねを指通され、「ム、尤、扨々軍記めは存の外なる不屈者、逆磔にもかくべきやつ、手討とはまだ御了簡。

シテ両人が成敗は」「ヲ、傾城狂ひの放埒者、勘當致してあはう拂ひ」「ム、是も尤。某も長居は恐れ、尤なる趣宜しく奏聞致さん」と、二つ胴を遁れた心地、足早にこそ歸りけれ。言譯なみだ生駒之助、刀逆手に取直す。「ヤア犬死せんとはうろたへ者、追放の身にいらざる武士立。最前一間より立聞けば、其女は貞任が、ナ、定めて遠い國の者、馴れなじみしこそ幸ひ、夫婦と成つて隨分添ひとげ、彼本國へ立退かば究竟の手がかり、心得たるか。環の宮の行方が知れねば、舅直方は大罪人、時宜に因つては敷妙が、緣の切目とならうも知れぬ。添ひとげるも義理、添はれぬも、浮世の義理と諦めよ」と、八重幡姫の事までも、思ひやり戸に忍び泣、緣の切目と嫂の情の襠顔と顔、餘所に見なして入り給ふ。かゝる所へ笠原が弟同名軍六、兄の敵遁さじと、大勢引具し追取りまく。それと生駒が、「コリヤ〳〵、纏絹、是でふせげ」と一腰を、しやんと柳の腰車、石げさ肩げさまくり切、逃ぐるをやらじと女夫は白刃、奥庭ふかく追うて行く。すでに時刻も宵闇に、外面を窺ふ笠原軍六、生駒が手竝にもてあまし、一拔ぬけたる拔けがけは、敷妙を奪取つて、我高名にと一人笑、あの亭こそと裏門の、塀に身をよせ耳を寄せ、窺ふ内には戀絹が、多勢を切りぬけそこかしこ、是を足場にあの塀と、差したる刀拔放し、つつこむ切先軍六が、胴腹思はず芋ざしに、のた打廻る纏武士。内にはそれとも白かべに、柄の

足代塀の上、ひらりと飛びたる折こそあれ、多勢をなぎ立て生駒之助、「女房出かした。維時が家來軍六を手にかけしは、忠義の門出手始めよし。サア戀絹」とつゝ立つ所へ、かけ來る瓜割大音上げ、「ヤア扶持離れの生駒之助、色事仕かと思ひの外、手にほうばつたる汝が働き。ソレ家來共討つてとれ」「承る」と近寄るやつばら、から竹なしわり瓜割主從、叶はぬ赦せと逃失せたり。返す敵もなみ木の馬場、さはいへ名殘と見返る生駒、我も廓をけふ限り、其うきふしもよき武士の、つま引上げて引きしめて、是よりすぐに打立たん、其行先は不破の關、清見白川衣が關、忍の關は有りし身の、口舌の柵手管の關、鳥の鳴くさへ憎かりし、今の此身は鳥の音に、函谷關を越えたる例、頓て目出たき世にあふ坂の、關所々々をやすくと、吾妻の空へと急ぎ行く。

第二

琴棊書畫を嗜む身とも生れず、旦暮物の命を取り、浮世を渡る綱手縄、浪打際にざはくと、かづきの海士が晝休「コリヤ長太のおかた、今日はお代官樣が、此外が濱を通らしやると、浦中はもやくく、すつきり仕事も手に付かぬ。聞きや此中は長太も潛に出やるけな、女夫しての

拝、いかう延びたと浦邊の噂」「ヲ、あの茂三の内儀の云やる事はいの。銀は延びいで、こちのアノ性悪が、鼻毛の延びるに困り物。四郎のおかたの知つての通り、去々年の月見の夜さり、脇腮脂取りにいた時に、海の中でとれ合ひ初めた女夫中」「ヲ、それ〳〵其夜さり、うらも岩の磧でこちの人に馴初め、今は子の親。こなたはなぜに子がない」「ヲ、子どころかいの、眞實に思うてゐるわしを、袖にしくさりくさつて、又しても女さへ見りや帆立貝、ホンニ、うらが思ひは、鮑の貝の片思ひぢやと思へば、悲しうござる」「ヲ、こりやおかたのが皆道理、シタガ、そなたばかりぢやないぞいの、海商賣とてどこの男も磯ぜせり、こちとらも修羅はたえぬ」と、三人寄れば男の噂。「ヤイ〳〵〳〵、又男のわんざんか」と、いうて海からによつこりと、上つてくる海士の長太、「あんまりわいらが譏る故、海の中でくつさめばかり、獵がきかいでやう〳〵と四五はい、是では鹽も呑めゐるものぢやない」と、いへば皆々、「テモ我をれ、男の仕事には大きな物、是では女海士もはだし。ドレいんで取溜の鮑、内でむいたりむかしたり、サア皆おじや」と打連れて、住家々へ立歸る。磯邊傳ひをくる女房、長太が見付けて、「ヲイ〳〵、文治の内儀どこへぢや」と、呼びかけられて立止り、「ヲ、誰ぢやと思うたら長太樣、内儀樣御精が出ます。聞いて下さんせ、ちつさが長の煩ひ、弱みの上へ大熱、けふは取分樣子が悪い、夫で濱手の醫者

殿へ藥を貰ひに。ホンニ此間の心づかひ、わしも癪が發りさうな」「ヲヽ、夫はいかいこな樣の氣もせや」と、女房がいふを引取つて、「コレ内儀、其癪にはきつい妙藥が有つて、醫者殿に貰て置いた。待つて居やしやれ、一走つい取つて來てやろ。コリヤかゝ何をきよろり、今の日和は何時が知れぬ、そよ〳〵と良風が來る、此間に一精出してこい。若ししけが來さうなら、此繩でしらすぞ」と、約束の千尋の繩、腰にしつかり女房が、舟端より眞逆樣、物馴れしこそ身過なれ。繩くりこして、舟張のくわんにてつ取り早く、「サアかゝめは沖へやつて仕舞つた、モウ邊に人はなし」と、口なめずりして上つてくる、長太がそぶりに氣も付かず、「そんなら世話ながら、今云はしやんした癪の藥を、どうぞ早う」と立寄れば、「ヘヽ藥やろというたはうそぢや。待たして置いたはかうせう爲ちや」と引だかへ、「テモうまい風では有る、此尻つきにふつとのほつて、いんまにさがらぬ臍の動氣。お前の此藥で直しておくれ。たつた一服で本復する」と、抱付けばひつしよなく、「何さしやんす、夫の有るわしを捕まへ、ぢやら〳〵と何ぢややら、鹽だらけな體して、あたしたゝるい」と飛突ばせば、「夫はどうよく、たつた一度。どうもならぬたまらぬ」と、抱きしめ〳〵抱きしめられ、何とせんかたなぎさの方、浪間へひどく鐵棒の、音に恟りふり返り、「ヤアなむ三、所の代官め。コリヤたまらぬ」とさしもの惡者、せう事なぎさに

心を殘し、其儘海へづぶ〳〵。こなたは嬉しさ此場の難儀、遁れて醫者へと走行く。程なく出でくる所の代官、鵜の目鷹右衛門、跡から庄屋が短い羽織、長い鼻毛を砂にすり付け、「ハイ、かうならびましたが此濱の組の者共、此浦邊は漁獵師男海人潜の蜑、其外山を持ぐ獵師も入込み外商賣はわづか故、總名を獵師町と申します」と、聞いて代官打點き、「ム、然らば、山獵師も有るとな。浦方はいふに及ばず、山獵師には別してきつと申付くる法度の趣、先達ても聞きつらん、鎌倉鶴が岡の神前にて、千羽の鶴をお放し有り、則氏神の御つかはしめと世に知らせん其爲に、金の札を付置かる。さすれば右の神鳥、何國の浦山におりたりとも、必麁略致さぬ樣との御上意なり」と、さも緩怠に云付け睨付け、濱手をさして打通る。跡打ながめて浦の者、「サア〳〵濟んだは。ア、お年寄御苦勞〳〵」「何の〳〵、御くらうはしくらうの上の事。皆も今のお觸合點か、金の札の付いた鶴打つ事はならぬぞや。鶴は愚、こんな時には鷺でも必打たぬ樣、皆念入れて觸れうぞや」と、打連れてこそ歸りけれ。お谷は醫者よりとつかはと心も足もいそ打つ浪の、中から出てくる以前の長太、かけ上つてほうど抱へ、「サアしてやつた。さつきにはうまい所を代官めが、うせたで怖さに巣入したれば、鯛と赤貝と口吸うてをつたを見て、イヤモどうもこたへられぬ」と、しがみ付かれてお谷はうるさく、「サア〳〵、まあコレ

爰放して」「イヤ放したら逃げさんす。慈悲ぢや情ぢやコレ拜む」「サヽヽヽ、どうなりとせうけれど、晝中にそんな事」「イヤだんない〳〵。爰でいやなら、海の底でついづぶ〳〵」「アヽめつさうな、鷲かなんぞの樣に、こちや水へはようはひらぬ」「そんなら幸ひあの舟で、結ぶの神は舟玉樣。サア〳〵此方へお出で〳〵」「エヽこりや何とする、放せ放せ。こちの人、文治殿」と、呼べど叫べどかひなみだ。「コリヤ泣かんすか、なくとは別して忝い。可愛男にや泣きよがちがふ、あしを屈めてゐのふで締めて、締めてしよがいの〳〵。コレ此樣にしめておくれ」と、引立て引ずり舟の中、「なんぼ泣いてもわめいても、爰はモウ海の中、其樣にぴん〳〵するといつそかうぢや」と舟張の、千尋の繩を帶にしつかり。「かうして置いて」と抱き付けば、「エヽ穢らはしい情ない」と、身をもむお谷が帶の繩、千尋の底へこたへてや、遙の沖へうつぽりと、浮上つたる長太がかゝ、遠目に夫と見るよりも、逆立つ浪を立およぎ、其儘舟へ飛上り、すつくと立つたる丸裸、鱗だらけのさばき髪、男を引きすゑくゝりし繩、とくより早くお谷は磯へ逃げ上る。やらじとあせる長太が腰蓑、引きずり廻しの結目に、くゝる千尋の繩ぐる〳〵、夫に向つてつく息は、道成寺を見るごとく、七卷まとうて、「サア長太、こつちへおぢや」と飛込んで、およげば繩に刎込まれ、「コリヤどうしをる」も聞けばこそ、水には強き女房の元氣、引立

て〳〵およぎ行く。お谷は胸を撫でおろし、立上らんとする所へ、戻りかゝる善知鳥文治、山より山に獵りくらす、海部刀の刃をわたる、腰に半弓山衣装、お谷はそれと、「ヲ、こちの人、今仕事から戻りかへ」「ィヤ〳〵、けふは風が高うて獵もきかず、山は疾う仕舞うたれど、戻る道で代官殿から鶴のお觸、お宿老へ呼付けられ、それで漸〳〵たつた今。シテちつさが樣子はどうぢや。病人をほつて置いてどこへ往た、めつさうな」「ィエ〳〵内には隣のおか樣を賴んで置いて、藥が切れた故醫者殿へ一走、戻る道で惡者の長太めがそれは〳〵」「フ、あいつがずだいほうには、誰も難儀するけな。ィヤその難儀で思ひ出した、そなたに悅ばすことが有る。ちつさが大病、人參でなければ助からぬとお醫者の指圖、あつというても長々の煩ひ、そなたやおれが物、衣類まで賣代なした上なれば、人參買ふあだてはなし、と云うて大切なは人の命、どうぞま一度本復さしたいと、胸を痛めてゐた所、聞きや、ちつさを大事々々と思ふ、二人が念が屆いたやら、よい儲筋を聞出したれば、人參買ふ工面が出る、悅びや」と、夫の咄に共勇み、「夫は嬉しい。そしたら私は先へいんで神棚へ燈明上げて」「ヲ、それ〳〵、おれは直に其銀の工面に行く」「そんなら早う戻つてや」と、いふ後から「文治々々、文治待て」「と云ふは誰ぢや」「ィヤおれぢや。借錢こはるゝがいやさに、見ぬ顏せうとは橫著者。跡月の日切の銀、けさから足

の棒に成る程いても、とかく内を外が濱、獵師町で口利く、車錢の南兵衞をようけつぶしたなア」「是は又南兵衞殿とも覺えぬ、不仕合を呑込んで借して下さつた日切の銀、片時も早うと心はやたけ、ちつとも如在は」「ヤアいふなく、銀戻さぬが如才でないか、戻すあてが無かなぜ借つた」と、いがみかゝれば女房分入り、「お前樣のが皆尤、今主のいはるゝ通り、下地のかわいた其上にちつさが煩ひ」「ヤアがつほしめが病を言立て、又古手な泣言か。豆板程な涙をこぼして、了簡していぬ者も有らうが、此南兵衞なんぼでもいなぬく。サア今受けとろ、サア渡せ」と、立催促に猶手をすり、「イヤモ段々の間違、佛の樣な其元も、腹が立たいで何とせう。どうぞ長うとは申すまい、マア二三日。コリヤく女房共、あなたへおわびをく」と、上手ごかしに脇道へ、文治は其場をはづし行く。南兵衞大きにむくりを煮やし、「ヤア人にばかり息精はらし、はづさうとは横著者、一寸もやらぬ、待ちあがれ、ヤイ待ちをれ」とかけ出す袂にお谷は取付き、「不躾ぢやと思召せばお腹の立つ筈、あの樣にせかれますも、ちつとなりと精出して、早うお銀が上げたさ。堪忍なされてどうぞ主の云はるゝ樣に」「エ、やかましい、べりべりとようべるげんさい。よいは、夫程にいふからは、違ふ事も有るまい待つてやろ。其代銀受取るまで、汝をおれが内へ連れていぬ」「エ、夫は」「ハテ銀の代に質に取る。サアうせあ

がれ」と、引立て〳〵情用捨もあら磯の、浪間から又ぬつと、首ばつかりで窺ふ長太、斯くと見るよりかけ上り、さうはさせぬと南兵衛が、兩足かいてづでんどう。其間にお谷は引つぱづし、逃げて行方はなかりけり。はふ〳〵のめに起上り、「テモつよいげんさいめ、もう逃げをつたか、どつちへうせた」ときよろ付く眼、「ヤア投をつたは汝ぢやな。銀の代りに捕へた奴、なぜ逃した」と飛びかゝつて、長太が弱腰中に提げふり廻し、「エ、片手にもたらぬひばり骨、締殺さうよりコレかう」と、ぐつと指上げ三段ばかり、遙の沖へざんぶと打込む白浪の、中からによつこり、「ヤイ南兵衛のあはうよ、海士を浪へ投込んだは汝が手味噌、陸では汝に叶はねど、海の中では千人力、手並が見たくば此所へうせい」と、いはれて南兵衛呆れ顏。潮の中から吹出し、「へ、へ、、ちつとこはかろがな、相手にはよう成るまい。そこで緩りと業さらせ」と、雜言惡口跡しら波、せんかたなぎさにぢだんだ踏み、「エ、どんな、川童めは川へ放す、銀は得とらず、あたぶの惡い」とふくれ頬、白砂けちらし立歸る。夕日浪をあらへば漁の火かと疑はる、まだ入相も遠淺の、洲さきにあさる鶴の聲、窺ひ近寄る簑と笠、邊を見廻し手元を堅め、切つて放せば拳に手ごたへ、さしづたりとかけ寄つて、脛根に付いたる金の札、ふつつと捻切り押戴き、かけ出す四方を五六人、「ソレ鶴殺しの曲者、遁すなくゝれ」と取卷く磯邊に、幸の、舟へひらりと

飛乘るさそく、陸には術もあら磯の、浪を押切り〳〵て、行方しらず　三重行末は、陸奥の内にはあれど外が濱、國の果とてあら磯に、狩漁を業として、世を押渡る一村の、中にも善知鳥安方とて、野山を家と狩りあるく。内は女房のしほたらと、子の煩ひに打ちかゝり、外には何も煎じやう、常のごとくにかけ土瓶、折燒く柴のくすぼりに、しんきをもやすかせ世帶。浦方の年行司、用有りさうに門口から、「文治、内にゐやるか」と、ずつとはひれば、「是は年行司の庄右衛門樣、ようこそお出で。連合はたつた今、出られましてござります。まあお上り」と人愛も、器量に連れて愛くろし。「ム、御亭は留守か、さらば上つてそ樣のお茶、其煮さつしやるを一ぶくたべうか」「イェ〳〵こりや茶ではござんせぬ、こちの息子が傷寒でさん〴〵。夫で藥煎じるのでござります」「何ぢや小癇ぢや、そりや藥より赤蛙喰はさつしやれ。こちの坊主めは大癇で、樣々の藥呑ましても直らず、そこで此庄右衛門樣の思ひ付、赤蛙十疋ばかり喰はしたればついに直つた。大かんでさへぢやに、小かんぐらゐなら、四五疋喰はしたらつい直る。イヤ夫はさうと、代官樣からの廻り狀、御亭が留主ならこなた見て、奥にしつかり判さしやれ」と、投出す一通手に取つて、「御存じの通り私は明瞽、御苦勞ながら讀んで聞かして下さりませ」「ム、ほんにこなたは無筆ぢやの」「アイ、恥しながら」と赤らむ顏。「何の夫が恥しい、娘子供が物書くと、

彼の思ひ〳〵く候をやりかけをつて、おのづから惡性になるというて、親々が教へぬは、遠國の偏屈、其樣に氣を付けても、見んごとはじける時分ははじけをつて、唄文はやりたし、書いたり讀んだりめんどくさい、いつそいもりの黑燒、お藥なんどをふりかけて、此庄右衞門樣の思付。ハ、、、、口叩かずとお觸狀、讀んで聞かそ」と押披き、「ム、何ぢや、一つ、とばかり跡は讀めぬ。高がかうぢや、此國の殿樣八幡太郎樣が、武運長久の爲ぢやというて、鎌倉とやらで鶴を千羽、金の札付けてお放しなされたげな。其鶴が今は此國にも徘徊する程に、必金の札の付いた鶴を取るなと有る每年のお觸、こりやいはひでも知つての事。聞かつしやれ、此四五日以前に、岩城山の麓で、彼金の札の付いた鶴を殺した奴が有るげな。法度をそむいた科人、夫で國中は嚴しいお尋ね、殊に此浦は殺生人が多いによつて、格別に詮議がつよい。若し殺した者が有るなら、早速訴へに出い。訴人の者には、たとへ親兄弟夫婦の中でも、其科を赦し、褒美として黃金十枚下されうと有る事。是の御亭も殺生好ぢやが、そんな覺はないかや」と、念を入るれば、「ヲ、つがもない、こちの人に限つて何のマアそんな事、必氣づかひなされますな」「ヲ、そんならよござる。兎角町には事なかれぢや。ひよつと此村に鶴殺しが有ると、縛り上げて京三界まで行かにやならぬ。夫がいやさに念入れるは、此庄右衞門樣の思ひ付。お

かた、其内來ませう」と、しやべり散して立歸る。お谷は藥漸〳〵と、煎じ仕舞うて枕元、屏風押明け、「コレ清童、けさから飯の湯もいかず、其樣に喰はずに居ると、醫者殿が呵らしやる。此藥呑んでから、わがみの好の茶粥の中へ、あも入れて焚いた程に、梅干に添へて一口くやや」と母親の、詞に漸枕を上げ、「イヤ何にも喰ひたうない。コレ嗚樣、とゝ樣はまだ戻らずか。こゝが術ない〳〵」と、數ゆる胸より見る親の、胸を痛めて手を差入れ、「ヲ、術ないは道理道理、せい出して藥呑んだりまゝくふと、此痛もつい直る」と、そろ〳〵胸を撫でさする、心づかひの外面より、外が濱の南兵衛とて、よつ程横へふとつた男、旅行李肩に引つかけ、くつわの亭主と思しき者、伴うてずつとはいり、「おかた來たぞや〳〵、南兵衛が來たぞや」と、たまからぐわらつく雷聲。「ヲ、これ病人が有る、聲びくにいはんせ」と、枕屏風を押立つれば、「何ぢや病人とは、ム、がりまか、なんの役に立たぬやつ、いつそてこねてしまやえいに」と、詞でたんなうさゝぬ氣と、知つてゐてもむつと顔、「ヲ、南兵衛樣何ぢやいな、まだ生先有る大事の息子、お前方のお世話にはなるまいし、構うて下さんすな。エ、いま〳〵しい」と捻ぢむく姿。「何と親方見事でござんすか」「イヤモごんす所ぢやない、あれがさうなら結構な代物」「そんなら道々咄した通り、三年切つて金五兩」「ヲ、出すとも〳〵」「合點なら打ちましよか」しやん

しやんも指さきで、おのれ一人が呑込仕事、「安い物ぢやぞえ、上方の相場なら、五十兩はぶらぶら、田舍だけで直打がない。コレおかた、大儀ながらいて貰ふかい」「ム、いて貰ふかとはどこへ何しに」「ハテ青森の町へ勤奉公に」「イヤコレ南兵衛殿、仇口はいつもの事と、聞流しにして居れば、付上つて出はうだい、あた穢らはしい勤とは。わしには善知鳥文治と云ふ、れつきとした男が有るぞや」「ハ、、、、れつきとした男かして、借つた銀をれつきと戻さぬ。もう催促も仕草臥れた、ぢやによつて汝を賣るのは、高が借した銀取るのぢや。有りがたいと思うて、きり〳〵いきやいの。但しわしが引立てうか」と、無法無體をとくよりも、戻りかゝつて立聞く文治、ずつとはいれば悅ぶ女房、「よう戻つて下さんした、女子一人とあなどつて、あの南兵衛が」「サアよいてや、何もかも聞いて居る、高が五兩か三兩のめくさり金に、女房賣らいでも濟む事」と、落付く安方せき立つ南兵衛、「イヤ厚いな〳〵、わりや身上が厚いか知らぬが、我等ずんど薄うなつて、家主にはぼんまくられ、身上有切り行李一くわん、宿なしとなつたれば、借した金とらにやならぬ。今というても銀は有るまい。サア親方、連立つていんで銀受取らう」と、お谷が腕引立つる、其手を取つてもぎ放し、「ソレ銀戻す受取れ」と、投出す金は金ながら、つひに見なれぬ金の札。「ソレ其札は金細工、今潰しでも三兩程の金目は有る。マアそれなりと

當座の質物」「ヲヽ、金にさへなる物なら、受取つてやらうが、三兩ではまだたらぬ」「ホヽ、其不足も、暮合ひまでには急度濟さう」「ムヽ、暮までなら間もない事、えいは待てやらうというてもほんなしなりや、いんで居る内がない。暮れるまで爰の内で居催促。コレ五助、大儀ぢや有つた、休んで貰ふ」「ハイ〳〵そんならもうよござりますか。ヤレ〳〵親方の役もよつ程氣のはるもの、さらばお暇申さう」と、立出づればお谷は不審、「あの傾城屋といふは」「ヲヽ虚言ぢや。かうしてゆすらにや金にならぬ、何とようしたものか。奥へいて一寢入せう、ぼんまくられて昨日からつがずぼう。お方、飯が出來たら起して下はれ。雜作ついでに酒も一ぱい」のみ取眼のいがみ頬、襖押明け奥に入る。跡には思案有り顔の、夫の傍に差寄つて、「申しこちの人、今南兵衛にやらしやんしたは、ありやマア何でござんす」と、問ひかけられて、「イヤありや此間ひらうて來たが、何の役に立たぬ物と思ひの外結構な金の札、あす入る人參代にと思うたれど、ほんの寶は差合せ」「ヲヽそんな物ならあいつにやらずと置いたがよい。今さらいふに及ばねど、清童の煩ひより、夫婦が着替はいふに及ばず、諸道具までも賣拂ひ、けふまで續けた人參代、もうあす入る人參の、代さへ人に渡して仕舞ひ、何の力であの子の本復。見殺しにせうよりは、南兵衛がいうたを幸、わしを勤に賣つてやり、其金で人參を、一分なりとたんと入れ、一日も

早うようして下さんせ。頼む〳〵」といふ内も、涙呑込むくもり聲。「アヽやくたいもない事いふ人、コレよう思うても見や、以前は鎚も持たせた身分、浪人したとて魂まで、女房賣るほど穢れもせぬ。氣づかひ仕やんな、人參代もとうから工面して置いた」と、ずつと立つて膳棚の、隅からおろす硯箱、緣はかけても放れても、昔しみ込む墨の折、ゆがまぬ武士の達筆に、さら〳〵と書認め、「コレお谷、大儀ながら此一通、代官所まで持つていきや」「アノ此書た物を代官所へ持つていけとはへ」「サア夫を代官所へ持つて行くと、大分の金がくる」「ムヽそりや又どうして」「サア今戻る道で聞けば、鶴を殺した者を訴人すると、褒美は黄金十枚との噂。其鶴を殺した者を、わしがよう知つてゐるによつて、夫でわがみを訴人にやるのぢや」「エィお前も日比の氣に似合はぬ、嗜ましやんせ。人の惡事を訴人して、褒美に貰うた其金で、どんな藥を呑ましたとて、何のきかうぞ本復せうぞ。恐しい事工まずとも、やつぱり私を勤奉公。親はなし兄弟持たず、お前さへ合點なりや、誰が點の打人はない。聞分けて下さんせ」と、縋り歎けば、「はて扨、役にも立たぬ事いはずと早ういきや。わしぢやとて人の命、何の訴人がしたからう。けれども是ばかりは訴人しても大事ない奴」「ムヽ大事ないとはそりやまあどこの」「ィヤ外ではない、奥に居るあの南兵衛」「エィすりやあの南兵衛が」「シィ、聲が高い。ほんの是が

厄病の神で敵とやら」「ヲヽあいつなら少々こちからこ出してなと、訴人のしたい悪者。そんならわしは一走いてくる程に、どこもかもようしめて、取にがさぬ樣にして置かしやんせ」と、小づま引上げいそ〳〵と、代官所へと急ぎ行く。夫は奥に氣をくばり、そろ〳〵ひらく佛壇の、佛の箔の光さへ、薄き櫨の花抹香、撞木取出したゞき鉦、「なまいだ〳〵〳〵」聲も幽に、「とゞ樣やかゞ樣はどこにぢや、こゞが術ない〳〵」と、苦しむ聲に鉦打止め、「ヲヽとゞは爰にゐる、嘘もおつ付け戻るが、藥でも呑みたいか」「イヤ〳〵藥はいやぢや。コレとゞ樣、必どこへもいて下さんなや。お前が留守ならおりや淋しい」「ヲヽ氣づかひすな、どつこへもいきやせぬいきやせぬ」と、口にはいへど心には、鶴を殺した科故に、今縛られて行くとも知らず、我を慕ふ志、可愛の者やいぢらしやと、思へば胸も張りさける、涙隱して、「コリヤ清童、とゞはどこへもいきやせねどな、もし用が有つて代官所から呼びに來ると行かにやならぬ。其時必泣くなよ。どうぞ早うまめになつてな。とゞが今看經するは大事のお主、其主の名を覺えて、大きう成るまで忘れなよ」と、又佛壇に指向ひ、「なむ俗名安倍の大夫頼時公、家臣鳥海の前司安秀が一子、同苗文治安方、今生にての回向の仕納め。南無阿彌陀佛〳〵。アヽ此殿未在世の時は、斯く申す我々まで、俱に榮花にほこりしが、いかなれば御武運拙く、八幡太郎義家が計略の矢先にか

かり、世を去り給ひし其月日は」「ヲ、卽今月今日が、父頼時の十三回忌、法名大了院殿喜山大居士、出離生死頓證菩提」と、唱ふる聲に立寄つて、障子ひらけば南兵衛が、姿は素袍立ゐほし、一つの位牌を上座に直し、合掌したる有樣は、興さめてこそ見えにけれ。文治はふしぎの膝立直し、「頼時公を父上とは、心得ぬ今の詞、仔細いかど」と尋ぬれば、「ヲ、不審尤、合戰の砌までは、まだ部屋住の其方、我面體を見知らぬは理至極。鳥海の城郭にて人となりし、安倍の三郎宗任」と、聞くより安方ハ、、はつと飛しさり、頭をたれて平伏す。宗任素袍の威儀繕ひ、「只今も申すごとく、今日父が忌日に當れば、平人の形で回向申すも云ひがひなく、暫く昔に立歸る我心は、是より直に都に上り、折を待つて父が仇、八幡太郎義家を討ちとらんず軍の門出」「ハア御尤なる御思立。猶も御心勵す一條、御父安倍の頼時公、栗坂の合戰に、討死有りし其時は」「ホ、兄貞任と諸共に、衣川の城内にて」「軍の次第逐一に、中上げしは我父前司安秀。其身も深手老の身の、栗坂より引返し、軍難儀に見え候、早く此城落ち給へ、早とくとくと、進むる月日はいかなる惡日、天喜五年九月五日」「ホ、其光陰も三つ羽の征矢、流矢來つて我父の、綿齧のはづれより、骨を碎いてむづと立つ、急所の痛手に勇氣もくじけ、つひに其手で果て給ふ。大將死すれば家の子郎等、親子兄弟ちりぐに、妻に別れ子をふり捨て、

兄貞任の行方まで、しら浪寄する浦々島々、はや義家が領地となれば、廣い世界に此體、置所さへなつ木立、木にも萱にも油斷せぬ、身と成り果つる其無念、腦を貫き腸を斷つといへども、時來らねば十三年、仇に戴く天の咎、磐石と成つて五體を碎く父の怨、追付け討つて尊靈へ、手向の追福仕らん」と、初めて明す南兵衛が、氏も系圖も陸奥に、竝ぶ方なき勇氣の大將。「ハア、適なる御心底、其御物語が直に追善。喜山大居士安樂國、南無阿彌陀佛」と回向の中、表へ誰か人音に、先暫くと間の襖、さし心得て待つ所へ、斯くとも知らず女房は、褒美の金に氣もいさみ、心も足もいそ〳〵と、「サア〳〵お金貰うて來た。代官樣のおつしやるには、追付け捕人を遣す程に、先へいんで取逃さぬ樣にせいとの云付、もう此處へ見えるであろ。南兵衛は逃げはせぬか、かういふ中も油斷がならぬ、早う來てちやつと縛つて下されいで」と、見やる表へ捕人の大勢、門口より大音上げ、「岩城山の麓において、鶴を殺せし大罪人は、此家の主善知鳥安方と、女房が訴人によつて召捕に向うたり。尋常に縄かゝれ」と、呼はる聲に文治安方、「顯れし上は隱すに詮なし、お尋の鶴殺し、縄かけて引かれよ」と、夫の覺悟にお谷が悔り、「コレそりやマア何をいふのぢやいの、鶴殺しは奥にゐる」「ヲ、南兵衛というたは僞、そちを訴人にやらうばかり。岩城山の麓にて鶴を殺し、金の札を取つたるは此安方」「エイ、すりや今私が持

つていた訴狀にも」「ヲ、自分の科を自分の白狀」「そんなら私が無筆故、夫でだましてやつたのぢやの。ハア」はつとばかりに伏轉び、途方なみだにくれけるが、「扨も〳〵世の中に、物書かぬ身の上程、つらい悲しいもの有らうか。連添ふ男の身の科を、書記した物とも知らず、悅びいさみ代官所へ、持つていたは何事ぞ。せめていろはを讀む程なりと、此目が明いて有るならば、何のいかうぞ。無筆と知つてかういふ使に、やつたはわしを世の人の、物かゝぬ身の見せしめに、なれといふのか文治殿、そりやあんまりどうよくな、むごい難面い心や」と、正體なみだに伏し沈む。夫も不便の涙を拂ひ、「ホ、其恨も尤ながら、何事も定まる業と諦めて、清童を隨分大事に、ナ彼人へ賴置く事是まで〳〵。サア繩かけて引かれよ」と、詞に猶豫も捕手の役人、「ヲ、神妙なり」と立寄つて、かくる繩目に取り付いて、お谷が泣聲清童が、屏風力に延び上り、「アレとゝ樣が縛られてぢや、詫言して下され」と、いふ聲俱に屏風もばつたり落入る我子。「ヤアこれ清童が死ぬはいの、コレなう是」とうろつく女房、繩付ながら夫もうろうろ、「コリヤ清童、必死んでくれなよ。われを助けうばつかりに、此とゝが命を捨つる。コリヤ氣を付けよ清童、清童やい」「清童いの」と、呼べどさけべど息絶えて、其かひさらになきたふれ、「けふはいかなる日なるぞや、我子に離れ夫に別れ、一人殘つてそもやそも、あられうもの

か淺ましや」と、妻が歎けば、夫は猶、涙にむせぶ聲を上げ、四百四病の煩ひより、貧程つらいものが有らうか。我子に呑ます人參の、價にせんと鶴を打ち、其鶴故に我命、取らるゝのみか子も死ぬる。思へば是まで多くの殺生、數多の鳥を殺す中にも、まだ巢離れもせぬ小鳥を、育てん爲に親鳥の、野山におりて餌を尋ぬる、夫とも知らず親鳥を殺せば、殘りし子鳥も死ぬる。まつ其如く我々も、子を助けんとて此親が、死ぬれば殘りし子も死ぬるは、歷然報う因果の道理、親故不便な死をさすか、こらへてくれ赦してくれ。父も追付け行く程に、六道の辻で必待つて居てくれよ」と、後や枕に取付いて、夫婦は前後正體も、取亂したるばかりなり。捕手は哀よそ目に見なし、「ヤア未練の歎に時移る」と、立寄つて引立つれば、是非もなはめに恥ぢしめられ、しを〳〵として立上る。「コレなう暫しと、女房が、寄るを突退けすがるを拂ひ、前後嚴しく取りまく人數、「ヤアお役人まづ待つた、鶴殺しの科人は是に在り、人違ばしせらるゝな」と、聲をかけて南兵衛が、一間を出づれば捕手の頭、「ヤア自分の白狀によつて繩かけし善知鳥安方、其外の科人とは紛はしき胡亂者、但し鶴を殺したる證據有つてか何と〳〵」「ヲ、證據は則ちこれ爰に」と、投出したる金の札、「鶴が岡の神前において、八幡太郎是を放つとゑり付けし金の札、其の札を所持するからは、紛れもない鶴殺し、科ない者を縛らずとも繩といて某を、早

：都へ引かれよ」と、思ひがけなき一言を、聞くより文治氣をいらち、「ヤアいはれぬ我をかばひ立、證據が有らうが有るまいが、科人は此文治」「イヤサ證據が有れば鶴殺しは此南兵衛」「イヤ某」と、あらそふ二人を制する捕手、慥なる證據有れば、科人は南兵衛に極る。此上は善知鳥がいましめ、はやとく〳〵」と南兵衛に、かけ替つたる縛り繩。「ヤアいつまでも此文治、家來の替りに御主人」と、いふを打ちけし。「コリヤ〳〵鶴殺しとなつて都へ引かれ、八幡太郎に見參せば、それこそ日頃の願成就。ナ合點か」と、目まぜにはつと心付き、「すりや御所存有つて」「ホ、會稽は今此時」「イヤ〳〵それは無用の振舞、たとへ再會の期は有るとも、身うごきならぬ其いましめ」「何の是しき、たとへ鐵の鎖を以て繫ぐとも、我爲にはわらしべ同然、一念頭にとゞまつて、本意を遂げし眉間尺、口に劍はふくまずとも、一心のねた刃を合さば、何條事の有るべきぞ。ナ心得たるか安方」と、身を鐵石にかためたる、詞に善知鳥も詮方なく、たとへ繩目は助かつても、存命ならずと肌くろけ、山刀拔き放せば、こはそもいかゞと止むる女房、南兵衛聲かけ、「ヤア何故の切腹、仔細ばし有つての事か」と、問ひかけられて涙を流し、「今は何をか包み申さん、只今死せし悴と申すは、我々夫婦が子にあらず、三代相恩の御主人より預りし大事の和子、御大病の介抱も、心に任せぬ身貧の某、此後主人にめぐり逢はゞ、何と言譯有

るべきぞ。只切腹を御容赦」と、おつ取る刀踏落し、「ヤアうろたへたるたはけ者、たとへ我兄、ナそれわれが兄の子、名は清童子といふにもせよ、定まる命は力及ばぬ。一人にても味方を招く今此時、犬死して忠義になるか」「スリヤ死ぬるにも死なれぬ命」「ヲ、まさかの時まで汝に預くる。いざお役人御苦勞ながら」と、いさむ縄付しをるゝ善知鳥、妻は泣く〳〵野邊送り、何營もなきがらは、子で子にあらぬ郭公、泣く聲をはつて血を吐く鳥、親も傍にて血の涙、ふらせばお谷がすが簑や、死骸を覆ふ隠れ笠、隠れあらざる弓取の、其御種ともお主とも、いふにいはれぬ苦しさは、鴛鴦を殺せし科やらん。善知鳥は返つて生殘り、我は擒となつたるも、敵を欺く氣の大鳥、追付け天下に羽うつ鳥、數々鳥の報いを爰にみちのくの、外が濱なる善知鳥の宮、安方町と名も高き、古跡は今に殘りける。

第三

さればにや少將は、百夜通へとゆふ闇の、笠にふる雪つもる雪、戀の重荷の朱雀道、七條堤の假橋に、盲女の引語り、襤褸の中の祕藏娘、十ばかりなが手を出して、右や左の道通り、西は九州さつまがた、鬼界が島の果までも、わしや行く氣ぢやにさりとては、花の都に袖乞と、

成りて住むこそ是非なけれ。王城の地は物貰も、つゞれさつぱり月代天窓、「どうぢやめくのお袖、よい貰が有るさうなの」「ヲ、かさの次郎殿か、今夜は闇で、人通は少し、北風は吹付ける、手がはぢかんで、三味線も引かれるこつちやない」「何をぜいらしい、寒の中に涼むのが、わがみの渡世ぢやないかいの。がりまはいねむりやせんかよ、商賣におよそな奴では有る」「ヲ、イどいつぢや、ム、とんとこの九助今仕舞うたか、儲けるな〳〵」「イヤ〳〵、とんとこも初手は取つたもんぢやが、せんぐりに新物が出てとんと衰微、もう今は町中がお長めに喰付き切つた。まだどういうても角を絶さぬ奴は佐野の源左衛門、あいつは株ぢや」「したがわりやよい儲けが有るかして、見りや立派な御座をかぶつて、はでな形するなア」「へ、いやもうこいつも冷たうて悪い物やい、ほんの見てくればつかりぢやはい」「色取るな〳〵」「ホ、、、、、ほんに夫も一盛、此方は此子一人が樂しみ。去年までは相應に一重の物でも縫うて著せたが、此春から内障に成り、俄盲で娘に介抱受ける身の上、行先を思ひ廻せば夜の目も合はず。今日はお君が誕生日、こんな中でも大事の身祝ひ、こな樣方にも祝うて貰ほと、酒も小屋に買うて置いた。したがあの六殿にはさたなしぢやぞや」「ヲ、あいつに呑ましたら一升や二升はついころり」と、人事いはど筵まで、呑上げる非人の六、諸方のしたみに目はすわり、ふくれ返つた腹立上戸、「けたい

ぢやぞ、げんさいの傍にべらくと、おけよ」「又六めはえらう引いてうせたな。あいつはえい得意を持ちをつて、濱脇の料理茶屋で、酒肴の喰飽しをる」「サヽ、夫がけたいぢや、おりやや業がわいてならんはい。けふも川作の屋敷振舞喰て來たが、惣體近年茶屋方の料理が粹過ぎて、おれが口に合はぬ、夫で腹が立つが無理か。そいで大道掃けの犬追へのと、下男か何ぞの樣につかひくさる。是ではもう乞食もやめにやならぬ。コリヤお君よ、をぢが風車買うてやろが、えらいか、おりやもうわれが可愛いてくヽ腹が立つはい」「ヲヽ、もうこちの娘が可愛いのが何の腹の立つ事で」「腹が立たいぢや、コレおめく、一體おりや、わがみの器量のえいのが腹が立つ、乞食だてら、そんな美しい顏がどこに有るものぢや、無理か、むりならどいつでも相手ぢや」と、くだまく聲も酒くさ原、踏分け來る瓜割四郎。「ソレ今のお侍樣、ハア」と二人が犬蹲ひ、「非人共が最前言つた生駒之助、傾城戀絹取逃したか、何と〳〵」「サア申し、畫ちよつと眼ばりましたれど、先もざぶなりや、めつさらにはかゝられず、ヤ幸爰にをる六といふやつは、酒くらふとあはう力、こいつに仕事さしませう。コリヤ六よ、爰へこい。又存在な臑投出して。辭義しをれやい」「いやぢや、おりや茶やの料理人より外に腰かゞめた事がない」「イヤサよう聞け、其二人のやつ、おいらが往て、ぐづりかけて爰へおこすは。われが爰に待伏して居て、男めをぶちのめ

す、そこでけんさいをあなたへ渡すと、御褒美にきすは存分。あなたの振舞呑込んだか」「ム、酒呑ますか、嘘ぢやないかよ。コレ殿様、そんならマア酒の方を先へせうかい」「イヤ〳〵〳〵、あの上呑すと本たはいになります」「チ、サ、コリャ六とやら、しおほせた跡では、呑喰はわが望次第、酒は伊丹の薦かぶり」「チット差合言はるな」「ム、こりや竈相。肴は鰒汁」「夫も差合、鰒はおれが同行中ぢや」と、横にふくれた腹鼓、咽をならして別れ行く。「もう人通りもなささうな、仕舞うて休も、サアお君」と、親子かたへの小屋の中、鳥のふしどと隣同士、露を荷ひし乗物釣らせ、源家の妹八重幡姫、こなたの土手を眞直に、平傔杖直方、互に行き合ふ挑燈の、紋に見しりの一家中、「是は〳〵八重幡殿、夜中に何國へ」「ちと心願の事有つて」「ム、神詣か、歩づから殊勝々々〳〵」と挨拶半、生駒之助は戀絹が、手を引き漸火かけを目宛、「狼藉者に出合ひ難儀致す、憚ながら此女を、暫しが間お預り」と、差出す挑燈、ハット恟り迯行くを、傔杖目早く、「コリヤ〳〵若者、わりや道に迷うたな、此處は京、きやうちうが闇いから、人の誠の本海道は行かずして、色々の道に迷うて居るな。ソレ火を借つてとつくりと、心の闇を見たり見せたり。身共は老人、猶以て何にも見えぬ。よし見えても、八重幡殿とは一家の中、急の用事、早参る」とはづす老巧粋親仁。妙下部さし心得、一人も殘らずばら〳〵と、氣を通されても濟

まぬ中、わざと慇懃三つ指に、「先以て姫君樣、御安泰の尊顏を拜し、恐悅至極と」相述ぶる。「ヲヽ、さういやるは無理ならず、したがもう其樣に氣を置いで下さんな、わしやふつょりと思ひ諦め、心の髮は切つて居る。ハテ、思ひ合つた中を引分け添うて何の本望。殊に兄上のお媒遊した戀絹殿、中よう添うて其代り、未來の緣をコレどうぞ、賴みまする夫婦の衆」と、思ひ切つては中々に、見向もやらぬ心根に、戀絹も恥入つて、「勿體ないく、夫を聞いてはわたしが方から、思ひ切るとも申されぬは、ひよんな物を身にやどし、退くにも退かれぬ惡緣。そんなら御詞にあまえて、お大事の物なれど、此世はわたしが借分、來世ではきつとお歸し申しまする其證據、ちよつと爰で御祝言のお盃がさせましたいが、ア、どうがな」と案ずれば、「其お盃私が差上げましよ」と、小屋の簾を押上げて、さぐる目病のすり足に、緣も缺けたる三寶土器、つどれの上の襠は、やれても昔床しげに、「どなたかは存じませぬが、最前から御尤なせつない戀のお咄、私も仔細有つて夫に飽かぬ別れをせし者、身に引當てょおいとしぼく、つどれの袖をしぼりしぞや。かやうに申さば賤しいきたない非人めが、穢らはしいとも思さうが、私とてもまんざら、前からかうした身でもござりませぬ。今日は此ちひさいやつが誕生日、昔を思ひ出して調へし九獻髮斗昆布、心ばかりの身祝ひ。幸の折からと、慮外を忘れたお媒。サアお

君、教へて置いた祝言の長柄、お酌申しや」と挨拶に。姫君嬉しく盃の、底意晴れたる取結び、さいつさょれつ酌みかはす。待ぶせしたる非人の六、酒の匂ひをかぐよりも、以前の仕込は忘れて仕舞、ほや〳〵笑顔もみ手して、「へ、、、、、ホ、、、、、、おめでたい御祝言、私もお取持にちつとお間、お酌是へ」とかけ茶碗、息なしに咽ごく〳〵、「ホウ、結構なお酒でござりまする。ハ、、、、旦那慮外申しまする」看は爰に有山の、面桶の底から鮹の足。「イヤ過分なが身は精進」『そんなら私祝うて最一つ下さりましよ。お家様上げましよか、おいやか、そんならも一つ下さりましよ。御寮人様もおいやか。そんなら我等も一つ」と、ほつとする程續呑み。戀絹が替つてお酌。「イヤ〳〵申し、見苦しくともやつぱりあれに、娘が生長あなた方にあやかり、よい殿御持つて祝言を、ホ、、、、、わたしとしたことが、非人乞食の身の上で、何の祝言どころと嘸お笑ひなされう。思へば〳〵淺ましい身の上。ハ是はしたり、大事のめでたい御祝言について涙が、私も祝うて、謡君は千代ませ〳〵と、くり言を祝ひ歌の、面白の時代や、おめでたや〳〵。祝ふに付けて我娘も、昔の身ならお乳めのと、對待十炷香藝づくし、教へも覺えもせうものを、ろくな事でも教へるか、橋の上の乞食の娘、誰が妻にも取つてくれう。侍の種を受けながら、町人百姓にも緣付の、ならぬは何の報いぞ」と、昔を忍ぶ悔泣、身につまされて三人も、いと

しや道理と俱涙。六も數獻の持ちこしに、貰涙のかい作。「どうやら酒が理に入つて、おれも悲しい〳〵」と、しやくり上げたる折からに、かけ來る次郎七九助、「コリヤ〳〵六、何して居る、きり〳〵しかけて壘んでしまへ。後詰にはおいらがゐる。早う〳〵」とせり立つれば、ないじやくり、「次郎七か、九助か、エ、わいらはえい機嫌ぢやな。おりやさつきにから哀な咄を聞いて、泣いてばつかり居るはいやい。わいらもアレ、あなた方の形を見い。雛樣のやうなお姫樣が、酒買ふ錢がないから、乞食に酒を振舞はれ、せめて天目でも有る事か、嚙みわる樣な盃に、酒ならたつた一升で、誤つてござる心根が、思ひやられておいとしい」と、涙と俱に又どぶ〳〵。「エ、いま〳〵しい又喰うたな。其酒こちへ」とたくりにかゝれば、「イヤ〳〵、夫から御らうじませう。どなたでもどいつでも、旦那衆に手向ふやつら、おれが相手」と、尻引つからげかこうたり。「どつこいやらぬは乞食に差合、貰うてこませ」と兩方から、取付くつどれの破れかぶれ、うぬらは世界の餘り物、命の高はげんこ取り、ころ〳〵轉び逃行くを、酒に任せて追うて行く。向うに數多の人音は、「申し〳〵、今の侍がくるので有らう。ちつとの間わたしが小屋へ」と、二人を伴ひ入る間もなく、血眼になつて瓜割四郎、どつちへうせたと家來もしどろ、しばし〳〵と傍杖直方、「コレザ四郎、あわたどしい面色、先何を詮議めさるゝ」と尋ねられて、

「イヤ何、其儀は貴公も此程御吟味なさるゝ、宮を奪ひし曲者、草をわかつて詮議せよと主人が云付。姫君も是にお渡り、此小屋が物くさい。ソレ家來共」「ナイ〳〵〳〵、非人め出ませい」『出をらう』と、呼ばれておづ〳〵這出づる。「つゝと出をらう」「ハイ」「まだ出をらう」「ハイ」「頬上げい」と突付ける箱挑燈の火明りは、老眼にも見違へぬ、絶えて久しき我娘。ハツ〳〵とばかり仰天ながら、聲をくろめ、直方「ムウ此小屋の非人は汝か。ハア非人ぢやよな。汝もよもや腹からの乞食とも見えぬ。町人か但しは武士の娘か」「ハイ御推量の通、成下つたは若氣の誤り、清水詣の折から、東國方の浪人と不圖剛初め、種を宿して是非なき家出、其夫にもあふぎの別れ」直「ホイ、はてな」四郎「ヤアくど〳〵〳〵云ふ手間で、うぬが親夫の名をぬかせ」「ハイ、夫ばつかりはどうも」四郎「なぜ〳〵」「名を申すほど不孝の上ぬり、此身こそかう成つたれ、親の名は出すまいと、晝は袖乞も得致さぬは、せめてもの申譯」直「ヲヽ、尤さう有らう。今の其心底を、誠の親が聞くならば」と、我名は言はぬけんぢやう向、千々に心ぞこもりける。四「ヤア彌以て胡亂者、まだ隱して有るやつが有らう、直に詮議」と立寄る鐺、しつかと取つて、直「お待ちやれ四郎、宮を奪ひしやつの詮議、お身は頼まぬ身どもがする、横合からいつかい世話。但し老人でかやうの吟味も得せまいと思うてか、推參至極」ときめ付けられ、「ア、これ〳〵〳〵

まつぴら御赦免、いやもう拙者も御一門の家來なれば、只今のは御心安立。イヤ姫君にももうお立ち、お供廻りはどつちへうせた、參れ〳〵」と脇道へ。「ホンニそれ〳〵、自も、夜の更けぬ内歸るがよかろ。此間にちやつと行くがよかろ」としらせの謎、お袖が小屋の後から、押しやる主從妹脊の別れ、親子のわかれは子は知らで、親の思ひの闇深き。傔杖が郎等あわたどしく、「只今大江維時公より、宮の御詮議何故に遲なはる、日延の時刻も一日にせまる、尋出すか切腹有るか、二つ一つの御返事有るべしとの御事なり」「ナニ維時が使とな、直に逢ひて返答せん。供せよ彌惣太、挑燈もて」とゆふ嵐、鐘もときつく八重幡姫、「傔杖樣の一大事、ァゝ氣遣はしや」「家來共乘物參れ」と呼はる聲、お袖が聞付け「申し〳〵、傔杖樣とは平傔杖直方樣ではござりませぬか」「イヤ夫聞いて何にする」「ァァ、そんなら今のが。コレ申し、一大事とは何の譯、ちよつと聞かして」「ヤァ面倒な」と突飛し、「乘物いそげ」と四郎が逸參、慈悲もしら砂ころ〳〵、ころぶ蘆邊の濱千鳥、嵐に髪もばら〳〵、親子手を取り雪の足、跡をしたうて三重たどり行く、心の内こそ哀なれ。平傔杖直方、環の宮の御行方、知らぬ筑紫のほとゝぎす、夏去り冬のいつしかに、既に今年の日の數も、春待つばかり枯殘り、枯果つる庭の檜皮ぶき、落葉の軒とふきかへて、殿守の女中仕丁もなく、老の忠義の一筋に、竹の園生の傅も、

つもる白髪に雪折れて、妻の濱ゆふ只二人、夫婦の人なんいまそかりける。緣先に立出で、「なう殿、お年寄の雪ふりに、庭へ出て何なさるよ。寒氣が入らうに、もうおはいり、ちと火にお寄り」ときり炭の、じようになるまで女夫合。「サレバ〳〵、宮樣行方なくなり給へば、此御所は明屋敷、我々夫婦が箇樣に御番は致せども、肝心の主なければ、玉の御殿も烏の塒と成果て、今日なども宮おはしますならば、仕丁共に木の葉の雪を拂はせて、御遊びなされうものをと、ふと思出して子供の眞似する雪なぶり、天地の中にさへましまさば、奪ひ返して此恥辱すよがんものと、心は雲にも入りたけれど、都の中を身動きならねば、空しく胸を煎るばかり。不便なは娘敷妙、日本の智者と呼ばるよ、八幡殿に連添ひながら、不覺を取つた此親故、夫の手前も恥しく、嘸肩身がすぼらうと、そも此春より一夜さも、實にねた夜はおぢやらぬ」と、奥齒もれくるまばら聲、「ア、よござりますはいの、弓取の不覺といふは軍の中の臆病、こりやほんの災難、敷妙が事おつしやるに付けて、思ひ出すは姉娘の袖萩、親にもしらさず、忍び男を拵へての家出、憎い奴と思うたも早一昔、其時はまだ十六の跡先なし、年もいたれば嘸今頃は悔しう思うてゐるであろ。どこにうろたへて居る事ぞ」「エ、又姉めが事くどくと、思ひ出すも穢はしい。不孝者といはうか、武士の家の不義放埒、再び頬も見まじと思ひしに、まだ業がみて

ぬやら、朱雀堤の橋の上で」「エ、橋の上で何としたえ」「サア、いや何ともせぬ。たとへ橋の上で、のたれ死しをらうが、不便なとも思はぬ、お身は又何とぞ思ふ氣か」「イヽエ、何とも存じませぬ」「ヲ、身共は結句心地よく思ふはい」と、口は憎てい、身を背け、物事つゝまぬ夫婦中、涙一つは隱しあふ。妙　共が取次の間、「敷妙樣御出」と、娘ながらも案内は、武家の行儀の表門、遏親子の中座敷、「ヲ、此頃は便もなし、心地でも惡しいかと、傳杖殿も案じてぢやに、ようおぢやつた。サア〳〵爰へ。テモ美しう髪結やつた」と、子供の樣に思ふは母、「イヤ申し、けふ參つたはお見舞ではない。傳杖樣へ、夫八幡太郎義家が使者でござります」「ム、ハテかはつた。表向の用事ならば、家來は越さで、そなたを使者とは」「コレ〳〵奥だまりやれ。何にもせよ使者とあれば、娘は内證。いざ御使者、御口上の趣承はらん」とありければ、「義家申越す仔細、環の宮お行方なき事、御傅の傳杖殿誤據なし。日延の日數も今日限、若しも言譯なきに於ては、罪を正す義家が役、聟舅の容赦は致さず、勅諚を以て取圍み、敵味方となり申さん、其時必ず遺恨にばし思されな。其爲申し遣はす。使者の口上あらく、斯くの通りでござんす」と、語る中より傳杖直方、いそ〳〵立つて一間の内、柳箱に飾つたる、簾と思しく携へ出で、「扨々八幡殿は天晴仁ある大將かな。元來某は平家、八幡殿は源氏、聟舅となるは稀な

る事と、そちを嫁らした其時より、聟引出に赤簇一流遣はし、八幡殿より此白簇一流、取かへて所持せしは、兩家合體の其印。此度の我誤りに付いては言甲斐なき舅、よしなき緣を組みしよと思はれんは必定。大方娘と緣切つて、此簇を取戻しに來るであらう。若し去られたら其思ひはいかばかり、どうぞ此白簇のやはり此家に止る樣にと、此頃神前に飾り置き毎日祈るかひあつて、今日娘を表向の使者として、差越されし八幡殿の心底、たとへ聟舅、敵味方になるとても、敷妙は去らぬとある情の謎。老人が心を察し、心づかひの御深切、逢うては禮も言はれぬ義理。お使者歸つて申されうは、仰越さるゝ趣一々承知仕る。委細の心底は對面の上申聞けん、お出を待つと傳へられよ。お使者大儀」と式禮も、弓矢の面裏門口、「八幡太郎參上」と、白衣ながらに入り給へば、「コハいつの間に」と敷妙も不審立ちそこに立つ母親、此比絶えし一家の參會、お茶よお菓子と賑々し。直方邊に目をくばり、懷中より一通取出し、「親しい中にも胸中を計りかね、今日までは聟殿にも包みしが、宮の御行方尋ぬべき手がかりといふは此狀、契約のごとく環の宮を密に盗出しくれよと、匣の内侍へ賴みの文體、名は誰ともなけれども、必定安倍の賴時が餘類、貞任宗任兄弟の族、奪取つて儕等が、味方を集むる柱にせん爲。さあれば御命に別條なしと、心の安堵はしながらも、言譯立たぬ身

の越度、我心を推量あれ」「ホヽウさそこ〳〵。我推察もそのごとく、此程奥州より捕へ來る鶴殺の科人、つら魂尋常ならず、肩口に二つの痣、是ぞ兼ねて聞及ぶ目印、疑もなく安倍宗任。一人は手に入れしが、今一人の兄貞住、此兩人さへ捕へなば、宮の行方明白たらんと、則彼の宗任を此館へ引かせ來る、禁廷の御沙汰なき中に、詮議肝要たるべし」と、力を付くる時しもあれ、桂中納言樣御出なりとしらすれば、「ソレ氣遣、私の内意か勅諚か、女儀は次へ」と改むる、座席に心殘れども、母と娘は立つて行く。中納言敎氏卿、衣冠の袂に薫りくる、雪より出でて雪より白き白梅一枝、小四方に取乘せ持參あり。「廉杖には此間、公の御不審蒙り、嘸心を痛められん。鬱氣をはらす此梅、まだ冬籠の枝なれど進上申す。此花と諸共、喜悅の眉を開かれよ」と、直方が前に差出し、「義家朝臣のおはするも、彼詮議の一條ならん。殊更親しき一家の中、御心底察し入る」「コハ卿の御詞とも覺えず、一家は一家、政道に依怙なき義家、詮議の手がかりになるべき科人、先達て捕へ置く。ヤア〳〵義家が家來共、鶴殺しを是へ引け」と、呼はり給ふ一聲に、「鶴の科人出でをらう」と、權威の下部は蠅蟲と見下し、破布子の繩付ながら、眼中威勢備はつて、實に大將と大將の、見參とこそ見えにけれ。「鶴を打つたる科人、外が濱の南兵衛とは假の名、奥州の住人、安倍の頼時が次男宗任ともいはるゝ勇士、夫程のへろへ

ろ縄、引切るは安かるべきに、わざと下部に引出さるゝは、義家に鬱憤を言はんず爲な、聞いて得させん、サア何と、語れいかに」とのたまへば、「是は又思ひがけもない、そんなむづかしい名は生れてから、聞いた事もござりませぬ。ばくち打の南兵衛に違なければ、元よりお前樣に勿體ない、鬱憤とやら一分とやら、きなかもかけ直は申しませぬ。兎角命が惜しいば つかり、どうぞお慈悲に縄といて、お助けなされて下さりませ」と、泣かぬばかりのしらぐしさ。「ムム然らば汝うぶの四夫下郎に違ないな。此簇を見知つてをるか、是こそ我父伊豫守、奥州追伐の折から、押立て給ひし白簇、其時宗任が親安倍頼時、大將めがけ放ちし矢先、ねらひはづれて此簇に受けとめ、即時に踏折り捨てられし、其矢の根はコレ此所に。ハ、、、、、、頼時づれが拙き運にて、源氏に敵對叶はぬ事。今にも其餘類あらば、却て敵の此矢を以て、斯くの通り」とてうど打つ、鏃は庭の手水鉢、じろりと見やつて、「是は扨、あぶない事を」とそらさぬ顔。教氏卿進出で、「よし手練はともあれ、たとへ眞の宗任なりとも、四夫下郎に等しき男、大望の企思ひもよらず。奥州の果に生れ、草木の名も知らぬ鹿猿同然の族、かくいふが無念ならば、コレこの花の名を知りつるか」と、白梅取つて指出し、「東夷の目にはよも知るまじ、知つたらばいうて見よや」と嘲哢ある。宗任ぐつとせき上げ、「南兵衛といふ下郎でござれば、花の名は

いかにも存ぜぬ。併しさうおつしやる教氏卿も、以前は流し者にあうて配所の島守、漸〳〵此頃召返され、冠裝束かけたればとて、正眞の山猿の冠、相手になる口は持たぬ。身が返答はコレかう」と、傍に立つたる件の矢の根、口にくはへて我と我が、肩口つんざく血汐の紅、何かはあやもしら簇に、鏃の筆のさら〳〵と、文字あざやかに染めなすは、東夷の名にも似ぬ、三十一文字の言の葉に、座もしら梅の枝折りて、冠傾き見えけるが、「ムヽ詞爭ひ無益しと、和歌を以ての返答、我國の梅の花とは見たれども、大宮人はいかゞいふらん。面白し〳〵、我に歌を詠みかけしは、返歌せよとの事ならん。さりながら最前汝がいふごとく、此教氏は父の卿諸共、幼少より島へ赴き、鄙に育ちし恥しさ、雲の上に座を列ねながら、我さへも得詠ぬ歌を、かく卽席に詠叶へし器量骨柄、問ふに及ばず安倍の宗任に違なし。いはれぬ歌で蛙は口から、我と我手に白狀せし、淺はかさよ」と一言に、勝色見する梅花の頓智、術に乘りし無念の宗任、口にくはへし鏃の手裏劍、大將めがけ打返すを、てうど留めたる源氏の白梅、「ホヽウ尤かうこそあるべけれ。生捕るも捕るゝも、時の運命恥とな思ひそ。猶此上に義家が、尋問ふべき仔細あり、こなたへ引け」と引立てさせ、奥の間さして入り給ふ。教氏傍を打ながめ、傳杖が傍近く、「扨々心づかひ察し申す、未言譯の筋もあらざるや」「ハッア夫故にこそ心を痛め罷

在る」「さこそあらん。夫に付き今日貴殿に心ざしたる此梅は、まだ寒中に室にて温め咲かせし花、天の自然にあらねども、春を待ち得て咲く花より、早きながめを人の賞翫。又ちる時も其通り、しほみかぢけて見苦しうならぬ先に、此枝のごとくさつぱりと、切れば却て香も深し。花に限らず身にも又、切時が大事、左様には思はれずや」「ム、御心深き此一品、ちりかゝつたる老の枝、切れと給はる天の賜。花物いはねど御謎に白梅の腹切刀、慥に落手仕る」「ヲ、天晴明察。大江維時なんといふ、讒者の嵐に吹きちらされぬ其先に、花は三吉野人は武士、名を後の世にちらさぬ樣の、思案ぞあらまほしけれ」と、梅に詞を句はせて、しづ〳〵立つて入りにける。只さへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間になほす白梅も、無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは、血筋の緣。不便やお袖はとぼ〳〵と、親の大事と聞くつらさ、娘お君に手を引かれ、親は子を杖、子は親を、走らんとすれど雪道に、力なく〳〵たどり來て、垣の外面に「アア嬉しや、誰も見咎めはせなんだの」「イ、エ門口に侍衆が、ゐねぶつて居やしやつた間に」「ヲ、賢い子ぢや。傳杖樣は此春から、主のお屋敷にはござらず、此宮樣の御所にと聞いて、どうやらかうやら爰まで來た事は來たけれど、御勘當の父上母樣、殊に淺ましい此形で、誰が取次いでくれる者もあるまい。お目にかゝつて御難儀の、樣子がどうぞ聞きたや」と、さぐればさ

はる小柴垣。「ムヽ爰はお庭先のしをり門、戸をたゞくにもたゞかれぬ不孝の報、此垣一重が鐵の」門より高う心から、泣く聲さへも憚りて、簀戸に喰付き泣き居たり。傔杖は斯とも知らず、「垣の外に誰やら人聲。アレ女共はをらぬか」と、言ひつゝ自身庭の面。外には夫となつかしさ、恥しさも又先立つて、おはふ袖萩しらぬ父、開けて恟り戸をぴつしやり。「何の御用」と妙ども、濱ゆふも庭に立出て、「傔杖殿何ぞいの」「イヤ何でもない。見苦しいやつがうせをつて。妙ども追出せ。ばゞ、あんな物見る物でない。こつちへお來やれ〳〵」と、夫の詞は氣も付かず、「何をきよと〳〵といはつしやる、犬でもはいりましたか」と、何心なく戸を開けて、よく〳〵すかせば娘の袖萩。はつとあきれて又ばつたり。娘は聲を聞知れど、母樣かとも得もいはず。母は變りし形を見て、胸一ぱいにふさがる思、押しさげ〳〵、「定めない世といひながら、テモ扨も、扨も〳〵思ひがけもない」「コレ〳〵ばゞ何いやる」「イヤさあ、やつぱり犬でござんした。ほんに憎い犬め、親に背いた天罰で目も潰れたな。神佛にも見離され、定て世に落果てをらうとは思うたれど、是は又あんまりきつい落果てやう。今思ひしりをつたか」と、餘所にしらすも涙聲。樣子しらねば妙ども、「さつても慮外な、物貰ひなら中間衆には貰はいで、お庭先へむさくろしい、とつとと出や」とせり立てられ、「ハイ〳〵、どうぞ御了簡なされて、まち

つとの間」「ハテしつこい」と女中の口々。「ヤレ待つてくれ女ども。ヤイ物貰ひ、お足がほしくばなぜ歌を諷はぬぞ。頑の筋も何なりと、諷うて聞かせ」と夫の手前、ちつとの間なと隙入れたさ。「あい」とはいへど袖萩が、久しぶりの母の前、琴の組とは引かへて、露命を繋ぐ古糸に、皮も破れし三味線の、「ばちも慮外も顧みず、お願ひ申し奉る、唄今の憂身の恥しさ。父上や母様の、お氣に背きし報にて、二世の夫にも引きわかれ、泣きつぶしたる目なし鳥、二人が中のコレ此お君とて、明けて漸十一の、子を持つて知る親の恩、しらぬ祖父様祖母様を、したふ此子がいぢらしさ、不便とおぼし給はれ」と、跡諷ひさしせき入る娘。孫と聞くより濱ゆふが、飛立つばかり戸の透間、抱入れたさすがりたさ、祖父もかはらぬ逢ひたさを、隠してわざと尖聲、「ヤアかしましい小歌聞きたうない。女共も奥へいて、お客人に付いて居よ。皆いけいけ。コレサばゝ、何うじ〳〵、早く畜生めを擲出して仕舞やれさ」「ア、コレ、腹立は尤なれど、夫はあんまり」「ハテ扨おばゝ、隙入るゝ程爲にならぬ。武士の家で不義した女郎、擲出すとはまだ親の慈悲、長居せばぶち放さうか。親の恥を思うて名を包むはまだしもと思ひの外、今となつて身の置所がなさの詫言、恥づらもかまはずよくうせた。但しは親へ頼當に、わざと其形を見せにうせたか、につくいやつ」と怒の聲。袖萩悲しさやる方なく、「なんの〳〵誓文、

勿體ないさりながら、さう思しめすも御尤、大恩を忘れた徒、我身ながらあいその盡きた此體、お詫申したとてお聞入れが何のあろ、そりや思ひ切つてをりまする。お屋敷の軒までも、來られる身ではなけれども、お命にかゝる一大事と、聞いて心も心ならず、顏押しぬぐうて參りました。不孝の罰で目はつぶれる、此子を連れて、爰の軒では追立てられ、かしこの橋ではぶち擲かるゝうきめにあうても、此身の罪にくらぶれば、まだ業の果し樣が足らぬと、未來が猶しも恐ろしい。此上のお願ひには、娘のお君、お目見えと申すは慮外、只の非人の子と思召し、たつた一言お詞を、おかけなされて下され」と、歎けばお君も手を合せ、「申し旦那樣奧樣、外に願ひはござりませぬ、お慈悲に一言物おつしやつて下さりませ」と言馴れし袖乞詞に濱ゆふが、「かはいやな、子心にさへ身を恥ぢて、祖父樣ともばゝ樣とも、得言はぬ樣にしをつたは、皆汝が徒故、畜生の樣な腹から見事犬猫も產みをらず、生れ落つると乞食さす子を、あの樣におとなしう、產付ざまは何事ぞ。あんまり憎うて、おりや物がいはれぬ」と、むごういふのはかはいさの、うらの濱ゆふ、「幾重にも、お慈悲〳〵」と泣くばかり。謙杖猶も聲あらゝか、「親が難儀にあはうがあふまいが、女めがいらざる世話、同じ兄弟でも妹の敷妙は、八幡殿の北の方と呼ばるゝ手柄、姉めは下郎を夫に持てば、根性までが下司女め」

と、恥ぢしめられてわつと泣き、「下司下郎とはお情ない、夫も本は筋目ある侍、黒澤左中とは浪人の假の名、別れた時の夫の文に、筋目も本名も書いてござんす。是見てたべ」と差出すを、取次ぐ紙のはしくれも、詫の種にもなれかしと、思ふは母より直方が、讀む文體の奥の名に、奥州安倍貞任とはなむ三寶、扨は貞任と緣組みしかと、心もそゞろに懷中の、一通取出し引合せば、扨こそ同筆、ハァはつとばかり當惑の、色目を見せじとずんと立ち、「穢はしい此狀、彌以つてあふ事ならぬ。サア奥こちへ、ハテぐづつかずと早おぢやれ」と、尖い詞にせがまれて、母も是非なく立つて行く。「なうコレしばし。もう逢はうとは申しませぬ、お身の難儀の其譯を、どうぞ聞かして下さりませ、申し〳〵」と延びあがり、見れど盲の垣覗、早暮過ぐる風につれ、折から頻にふる雪に、身は濡鷺の蘆垣や、中を隔つる白妙も、「天道樣のおにくしみ、受けし此身はいとはねど、樣子聞かねばなんぼでも、いなぬく〳〵」と泣く聲も、嵐と雪に埋もれて、「聞えぬ父」と恨み泣く。次第々々にふりつもる、寒氣に肌も冷え切れば、持病の癪の差込んで、かつぱと轉べばお君はうろ〳〵、さする背中も釘氷、涙かた手に我著物、一重をぬいで母親に、著せてしよんぼり白雪を、すくうて口に含ますれば、漸〳〵に顔を上げ、「ヲヽお君もうよござる。此又冷える事はいの。そなたは寒うはないか

や」「イエ〳〵わたしは、溫うございます」「よう著て居やるか、ドレ〳〵、ヤアそなたはこりや裸身、著物はどう仕やつた」「あんまりお前が寒からうと思うて」「ヘッエ親なればこそ子なればこそ。わしが樣な不孝な者が何として、そなたの樣な孝行な子を持つた。是も因果の中か」とて、抱きしめ〳〵泣く涙堪へかねて垣越に、襠ひらりと潛ゆふが、「さつきにから皆聞いて居る。アッア儘ならぬ世ぢやな。町人の身の上ならば、若い者ぢやもの、徒もせいぢや。そんなよい孫產んだ娘、ヤレでかしたと呼入れて、聟よ舅といふべきに、抱きたうてならぬ初孫の、顏もろくに得見ぬは、武士に連添ふ淺ましさと、諦めていんでくれ。ヨ、ヨ」といふ中に、「奧濱ゆふ」と呼ぶ聲に、「アイ〳〵そこへ參ります。娘よ、孫よもうさらば、かはいの者や」と老の足、見返り〳〵奧へ行く。折しも庭の飛石傳ひ、雪明りに窺ひ寄る、安倍宗任戸を引明くれば、「アアこは」と、立ちのくお君をじつと捕へ、「コリャこはい事はない伯父ぢや」「エ、イ伯父樣とは」「ヲ、そちが伯父の宗任ぢや」「ヤア宗任樣とは夫貞任殿の弟御」「ヲ、ごひに逢はねど嫂の袖萩殿」「ア、そんならお前に問うたら知れるであろ、夫婦別れる時、夫に預けてやつた、此子が弟の淸童は息災で居るかいな」「ヲ、其淸童はの、傷寒で死んだはいの」「エ、イ、ハア」「ヲヲ歎は理、何かに付けて一家の敵は八幡太郎、こなたも兄貞任殿の妻ならば、今宵何とぞ近寄つ

て、直方が首討たれよ」「エヽイ、あのとゝ様を」「ヲ、生け置いては我々が大望の妨、此懐劍で」と手に渡す、難題何としやうじの内、「曲者待て」と大將の、聲に恟り「折悪し、そちへ〳〵」と忍ばせて、胸をするゑてどつかと坐し、「縄引切つて逃出でんと存ぜしに、見付けられたは運の極め。サアいか樣とも行はれよ」と、腕押廻せば義家公、縄にはあらで眞紅の糸、結びし金札宗任が、首にさつくと打ちかけ給ひ、「網に洩れたる鱗を、助けるは天の道、鳥類の命さへ重んずる我心、況やあつたらしき勇士、命を助け、ソレ其札、康平五年、源義家是を放つと書記せば、此上もなき關所の切手、肩口の痣は切りさいても、武將の息のかゝつた汝、繋ぎし犬も同然、日本國中を放飼、何國へなりとも勝手に行け」と、仁者の詞にハアはつと、雪に頭は下げながら、底の善悪閉隱す、氷を踏んで別れ行く。夫の最期を濱ゆふが、白梅の腹切刀、三寶に乘る露涙、外にも同じ袖萩が、思ひがけなき難題に、死ぬより外はなく〳〵も、歸る戸口に父兼杖、鑷に錠しつかとおろし座に直り、三寶取つて頂戴し、押肌ぬいで覺悟の矢の根、取るとはしらぬ袖萩が、娘に見せじと突込む懐劍、はつと驚き取付くお君、聲立てさせじと抱きしむれば、母は夫が片手に押へ、「まだ女めはいにをらぬか。氣づよくはいふものの、年寄つた體、いつ何時の病死もしれぬ、聲なりともよく聞いておけ」と、それとはいはぬ暇乞、とは露程も

袖萩が、「扨はお心和らぎしか。かう成果てた身の上、どうで追付のたれ死、是がお聲の聞納めで、ござりませう」と親と子が、一所に死ぬとは神ならぬ、障子押明け立寄る敎氏。母はかけおり、「ヤアそなたは自害したか、傳杖殿も御切腹」「エイ、とゝ樣も」「娘も」と、一度に驚き轉びおり、垣押破り張りさく胸、呆涙にわかちなし。手負を見屆け中納言、「樣子具に承る。貞任に緣を組れし御邊、婚の詮議もなるまじ。所詮死なで叶はぬ命、袖萩とやらんも死なずはなるまい。跡の詮議は某がよき樣に計はん。健氣なる最期の樣子、天聽に達し申すべし」と、冠け高くしづ〳〵と、心殘して立出る。衣紋に薫る風ならで、奇しや聞ゆる鐘の聲、コハいぶかしと立戻り、邊に心目を配る、一二の對の屋隅々に、太鼓の音の喧し。「ハテふしぎや、此明御殿に陣鐘を打立つるは、何者なるぞ」とふり返る、一間の内より高らかに、「八幡太郎是にあり、奥州の夷安倍貞任に見參せん」と、立出給ふ御大將、續いてかけ寄る二人の組子、さしつたりと身をかはし、弓手妻手へはつたと蹴飛し、「ヤアラ心得ず、桂中納言敎氏を、貞任とは何を以て」「ホヽウ此義家、天眼通は得ざれども、弓矢の道には賢き某、過ぎつる大赦の砌、桂中納言なりと名乘來る其時より、島育を云立に歌詠まず筆取らず、何條しれ者ござんなれと、つくづく面體を窺ふに、我が稚き時見覺えし安倍頼時にさも似たり。扨こそ宮の御行方、十握の寶劍

をも取隱せしに極つたり。姿をかへて禁廷へ入込みしは、猶二色の御寶を奪ひ、親が根ざしの大望を達せんとの工よな。あらがはれぬ證據は是」と、白旗を取出し給ひ、「最前汝が弟宗任と、別れて程へし兄弟の對面、梅の花によそへし我顏を、見覺えたるかとかけたる謎、早くも悟つてコレ此歌、我國の梅の花とは見たれどもとつらねし上の句、梅の花は花の兄、我國とは、我本國、奥州の兄ならんとの詞の割符、兄弟一致の此血判に、白旗をけがせしは、源氏調伏の下心、此上にも返答あるや、何と〳〵」と差付けられ、貞任無念の牙を嚙み、逆立つ髪は冠を貫き、怒の大息ほつとつぎ、「エ、口惜しやなあ。我一旦浪人となつて、都の樣子を窺ひしが、官位なくては大内へ入込まれずと、流人赦免の折を幸、誠の敎氏は先達て病死せしを、我なりと僞つて、つひに逢はぬ舅傳杖、けふ始めての對面に情らしく見せかけて、腹切らしたは詮議の種の一通をとらん爲。所詮謀空しくなれば、親の敵八幡太郎、相手向ひの勝負して、運を一時に決せん」と、太刀に手をかけ詰め寄れば、「ハヽァせいたりな貞任、汝獅子王の勢ありとも、八方に敵を受け、一人の力に及ばんや。又其方が一命は、環の宮と寶劍の所在、責むるとも よも白狀せじ。術を以て搜出す夫までは、いつまでも助け置く。命ながらへ時節を待つて、戰場の勝負はなぜせぬぞ。今犬死して親類時が、大望は無にするか。弓矢の情は相互、夫婦の操も

節義は一つ。貞心厚き袖萩が、最期の際に一言は、妻子に詞もかけよかし。暇乞を」と仁愛に、「なうなつかしの貞任殿、最前からよう似た聲とは聞きながら、あんまり思ひがけもない、六年ぶりで廻り合ふ、顔見る事も叶はぬか。死ぬる今はにちよつとなと、此目が明きたい、コレお君」「とゝ樣なう」と稚子を、見るに遺の貞任も、恩愛の涙はら〳〵。大將憐み思し召し、「てゝ親の緣切れたるお君、義家が子に養はん」と、仰に傳杖有難涙、「いかなれば某は、敵と味方を婚に持つ、因果も思ひ廻らせば、代々不和なる源平を、先祖に背いて緣組んだ、我誤りを白旗の、此白梅を血に染めて、元の平家の寒紅梅、娘」「父上」「いざ一所に。婚殿さらば」「我夫さらば」「傳杖殿」「姉樣なう」と別れの涙、母の袂も敷妙も、一度にわつとぬるゝ袖、御大將も直垂の、袖射削づつて餘りの矢先、竹にたちまちすつくと宗任、「最前見遁し歸りしは、兄弟本意を遂げん爲、優曇華まさりの親の敵、サヽ勝負〳〵」と詰めかくるを、貞任しばしと押しとどめ、「晉の豫讓は衣をさく、八幡とは八つの幡、此白幡をまつ此ごとく手に取れば、八幡が首提げんは案の内。敷妙の身には大切な、夫婦の緣を繼目の簇、ソレ大事に召され濱ゆふ」と、渡すは舅のはた天蓋、舅が最期に魂を、ひるがへしたる梅花の赤簇、「我家の簇諸共に、奥州に押立て〳〵、父頼時が弔軍。一先此場は、宗任來れ」「ハツァ實に尤兄者人、雪持

つ笹は源氏の簇竿、一矢射たるは當座の腹いせ。首を洗うて義家お待ちやれ」「ヲ、〳〵互に戰場々々。夫は重ねて、まづ眼前に朝敵の安倍貞任、生捕つて面縛させん、といふは表、其裝束を其儘に、桂中納言敎氏卿、御苦勞ぞふ」と式禮に、おさらば、さらばと敵味方、著する冠裝束も、古鄕へ歸る袖袂、かりの翅の雲の上、母に別れて稚子が、父よと呼べばふり歸り、見やる目元に一時雨、ぱつと枯葉のちり〳〵嵐、心よわれど兄弟が、又取直す勇聲、よるべなみだに立ちかねて、幾重の思ひ濱ゆふが、身にふる雪の白妙に、なびく源氏の御大將、安倍貞任宗任が、武勇は今に隱れなし。

第四　道行千里の岩田帶

傾城の、癪は誠の置所、世界の客へそら言も、ひとりにつくす眞實の、戀の中なる戀絹が、寐姿恥ぢぬ中となる、其こしかたの通ひ路は、花車のかけ橋渡り初め、生駒の手綱せきとむる、くつわの關を打越えて、今は女夫の藥賣、わらぢにかくす八文字、おろせ賴まぬ日傘、さして行くへは陸奥の國、睦月に出でし都の空、谷の初聲聞初めて、彌生は花の生れ月、うしや櫻の顏隱す、霞をはらふ春風を、仇とは誰がいひ初めて、草のはつかに解く紐の、結ぼれ合ひし朝

寐髪、しんきらしいも命かや。人目づつみに荷をおろし、「家傳葛城神靈丹、御用はござんせぬか、お求めなされ」「買ひなさんせ」と賣聲も、遺それしやの身なれども、迷ふは木々や若草に、つまこふ蟲の聲なくて、けはひはがせしくれの蝶、とまり定めぬ浮世はなんの、眞間の入江を見渡せば、月は渚に乘りおくれ、浪より雲に入り舟や、風に逆櫓のさつ〳〵さ、さつととわたる鳥の聲、唄雁金よ、其玉章はたが文ぞ、戀の宛名は只一人、越のしら山ふる里よりも、月につれだちもてくる文を、花に別れて歸るは返事、ヲヽ嬉しヲヽ嬉し、ヲヽそれ誠我もまた、かぶろ立から物馴れて、人のやりくり文づかひ、身にしら糸をおり出す、瀧は流れを立てる身に、清き心をたゝう紙、のべにそよ〳〵こちの人さまよ、ヲヽよい女房と戯れの、わりなき中も媚君に、未來の契り盃の、井筒にかけし生駒樣、我は裏見のたきさしに、いつかすがりと捨てられん、エヽさりととては浮世ぞや。いつそ此身は此儘に、黑髪山の墨染と、思ひ切るにも切れはせで、此世ばかりの女夫とは、ほんに結ぶの神さんも、粹の樣にもない事と、はかな女のかこち言、妹脊のねぐら夕風に、ぱつと立つたる雀の宮、竹に緣ある源を、守る誓はたゞ頼め、標茅が原のさしもぐさ、我一命のあらんかぎりは、御あり家尋ね出して大君を、ふたゝ

び都へきつれ川、吉左右清き道の邊の、清水ながるゝ柳かげ、しばしとてこそ三重やすらひぬ。東山道の國の果、陸奥一國の出入を改め、非常をしめす白川の、關の守は瓜割四郎、一人權威をつく棒さす股、ことぢに通ふ雁金まで、赦さぬ道の關の戸は、嚴重にこそ見えにけり。生駒夫婦は關所とも、いさしら川の番所の前、通りかゝれば下部ども、「ヤア慮外者めらが、爰をどこだと思ふ、瓜割四郎樣の堅の關所、笠をぬいでかつつくばひ、どれからどれへ參る者と、斷つて通りをらう」と、留められて戀絹が、瓜割四郎と聞く驚き、猶顏隱し行過ぐる。「ヤア胡亂者遁すな」と、立寄る下部を生駒之助、「ア、申し〳〵、胡亂なものではござりませぬ、御覽の通り我々は藥賣、伊達な所を目印に、賣弘むるとは申しながら、あの日がさで顏隱さねば、口上の一口も得申さぬが女だけ、顏隱すが癖となつて、關所とも憚らぬ不調法、何事も女だけと御用捨なされ、お通しなされて下さりませ」と、いひくろむれば瓜割四郎、「ヲ、聞屆けし、女商人へ用はない、早く通れ」と、赦す詞に二人は嬉しく、笠かたむけて立出づる、戀絹が手をしつかと取り、「イヤそもじばかりはいつまでも爰に留める。生駒之助に用はない、戀絹置いて早く通れ」と、いふに夫婦が恟りし、「スリヤ私等を見違へもせず、お前はよう覺えてか」「覺えてかとは曲がない。深山烏も白鷺も、我妻烏は知るものを。たとへ姿はかはつても、見ちがへて

よいものか。爰で逢うたは盡きせぬえにし、是から我らが宿の奥樣、何と憎うは有るまいが」と、よれつもつれつよねんなく、恥を恥とも思はぬ赤頬、抱付いたは山蜂が、花の露吸ふごとくなり。「ヤア尾籠至極」と、四郎を取つて突放し、「昔は昔、今は志賀崎生駒が女房、望ならば汝が首と、替物せん」と呼ばはればせよら笑ひ、「ヤア素浪人の分際で、しやらくさい女房呼ばはり、戀絹に汝が首添へてこつちへ受取らう」と、いふより早く切つてかゝる。心得たりと身をかはし、腕首取つて引くり返し、骨も折れよと踏付け〳〵、踏付けられて半死半生、「ヤア主に敵たふ慮外やつ、ソレ遁すな」と數多の下部、一度に拔いて切つてかゝる。「ヲ、しほらしい蠅蟲ども、うぬらも主の相伴」と、片手なぐりに切りまくられ、詞にも似ずちりぐに、逃ぐるを追うていこま之助。「コレなうあぶない長追無用」と、呼ばはり〳〵戀絹も、跡に續いて走行く。一人殘つて瓜割四郎、心はやたけとはやれども、足も體もぐにや〳〵と、ところてん見るごとくにて、立ちも得やらぬ有樣は、目も當てられず哀なり。かゝる折から賣來る、「藥は町中評判のあんぽん丹、御用ござりませぬか、何にきくともきかぬとも、しらぬ所があんぽん丹。御用とござれば一貝が三十二錢、半貝が十六錢、心見と申すが僅八錢。あんぽん丹御用はござりませぬか」と賣聲聞いて、「コリヤ〳〵藥屋、先々待て」と呼止め、「身どもが事は瓜割四郎

というて、此關所の役人なるが、いかなる過去の報にや、すは合戰に赴かんとすれば、忽五體ぐにやと痿え、コレ此通ぐにやと痿え、心ばかりをいらつといへども、挑燈で餅つくごとく、かいもくとんと役に立たぬ。なんと體がしやつきりとなる藥があらば求めたし」と、世にも哀に問ひかくれば、「コレハ〳〵お前はきつい仕合者、抑此あんぽん丹と申すは、一名を長名丸と申して、其樣に氣ばかりせいて、何の役に立たぬ人に、此藥を用ゆれば、忽五體鐵石のごとく、譬へば强敵入りかはつて合戰すとも、ちつともよわみを喰はぬが名方。先心見に一貝上つて御らうじませ」と、小さい錫の器物、取出して手に渡せば、嬉しげに指先に、付けて一口呑むよと見えしが、むつくりしやつきりすつくと立つて、「あらふしぎや、此藥我のんどを過ぎるやいなや、忽五體ひり〳〵として、其あつき事火焰のごとく、筋骨共に節くれ立つたる心地よさ。ハア、誠や、氣は陰にして其色白し、陰中の陰今變易して紫の色を顯はす事、偏に此藥の德にあり。ハア、權妙なりふしぎなり」と、めつたに虛空を睨付け、諸手を組んで立つたる有樣。「なんと奇妙でござりましよが、まだ責道具が入るならば、具足なりと兜なりと、鉢卷もござります。申し其かはりに、必茶をあがりますな、湯茶をあがると元の通にぐにやつきますぞ」「ヲヲ過分々々」と代物渡せば藥屋は、箱をかたげて別れ行く。始終の樣子をとくよりも、戻りか

かつで立聞く二人、戀絹が耳に口、何やら呼き生駒之助、元の所へ立忍べば、戀絹態とおろおろ聲、「生駒之助樣いなう」と、呼はり呼はりうろ〳〵と、尋ねさまよひ四郎にばつたり、「ヲヲ怖は、誰ぢや」と立退けばしがみ付き、「イヤこはい者ぢやない、只居よより四郎ぢやく。そもじを待つて最前から、しやきばつて居るはいの」と、餘念のないを見て取るそれしや、「ヲヲお前なら恂りはせぬはいな。誰ぢやと思うてつかへが上つて、あいた〳〵」と胸撫でさすれば、「何としたく、癪でも痛むか、藥やらう」と紙入より黑丸子、「ア、申しお慮外ながら、水でもあらば一口呑して下さりませ」「イヤ〳〵、水は毒だ、茶を呑まさう」と番所より、茶瓶　茶碗持つて出で、「コレ一口」と差出せば、「ア、申し、ぬるいやらあついやら、呑んで見てくれたがよい」と、氣を持たされて、「實も〳〵、我等が呑みさし呑む氣ぢやの、コリヤ忝い」とぐつと一息、呑むと其儘「ア、〳〵〳〵」と、いふより早く體は忽ぐにや〳〵〳〵、たはいやくたいなみ木のかけを、立出づる生駒之助、「扨てもきついうつそりめ、汝がほんのあんぽん丹、付けう藥のないやつ」と、どつと一度に打笑ふ。折から又も追ひくる人音、「とてもの事に跡腹の、痛まぬ樣にしていこ」と、上張ぬいで手つ取早く、瓜割四郎に打著せく、暫し木蔭に立忍べば、引返す數多の家來、「ソレ最前の藥屋め、遁すなくゝれ」と衣裝を目宛、大勢寄つて手

取り足取り、騒立つたる透間を考へ、時分はよしと戀絹夫婦、跡をも見ずして　三重遁れ行く。寒林に骨を打つ靈鬼、深野に花を供ずる天人、風漂茫たる安達が原、隣る家なき一つ家の、軒の柱はすね木の松、己が氣儘にまとはるゝ、蔦は逆立つ鱗の如く、いづれの工か青龍の、形を削りなせしかと、さも物すごき破屋に、住馴れ居馴れ手馴れたる、かせの車やわくらはに、來る人稀の黄昏時、「御無心ながら煙草の火、一つ借して下さりませ」と、笠を片手に旅の者、老女は簑をくり止めて、「ヲヽ暮れるまであるかしやますは、何ぞ過急の御用か」「アヽちつと急ぎのかはせ銀、福島まで持つて行く者ぢやが、暮れるので氣がせきます」「何ぢやかはせ銀を持つて行くのぢや、アノ銀をや。ヲヽ此物騒な安達が原、追剝に出合はぬ樣に、用心していかしやませ」と、いはれてこなたは惚り顔、「アノ追剝が出ますかの」「ヲヽ出るとも〳〵、きのふもちやうど今時分に、アレ向うの森の中で殺された人がある」ヤアといふより身はがたぐ、「申しかみ樣、我等生れ付いて其追剝がきつい禁物、どうぞ今夜は爰の内に、泊らして下さりませ」「いやなう、其樣に銀持つた人をこちの内に留めては、マア氣が張つて夜がねられぬ」「サアそこがお情、お慈悲はかみ樣」「ハテ夫程怖か留めてしんぜう」「ハイ〳〵、夫は近頃忝い」と、草鞋といて上り口、「ヤレ〳〵嬉しや、是で心が落付いた」「イヤ、めつたに落付かしやんな、

爰に泊つても、こなたの懐に銀があると、又追剝が來をろもしれぬ、其銀ばゝが預りましよ」「イヤ夫は」「ハテ扨悪い事はいはぬ」と、手を差入れて引出す財布、「それ渡しては」としつかと握り、「おばゝ、こりやわごりよが剝ぢやの」「何のいの、預つてやるのぢや」と、財布持つ手に兩手をかけ、引けばこなたも門口の、柱を片手にひんだかへ、引いつ引かるゝ力に腕すつぽりと、拔けて尻居にへたばる老女、「コリヤおれを殺すか」と、よろめく旅人を打倒し、のつかゝつて喉へ、ほうと喰付き喰殺す、老女の業ぞ恐ろしき。「ア、嬉しや」と疊を上げ、死骸を蹴落し口のはた、のごふ血汐の腕取上げ、「エ、しぶとい、まだ財布放しをらぬ。ア、儘よ、腕ぐち取つて置かう」と、芋桶の底へ取納め、唄又繰返す糸よりも、頭のおがせかき亂す、草に育てど草ならぬ、花は鄙でも都でも、可愛らしさと憎さげは、跡から付いてあんぽん丹、聲がはりのした大前髪、「コレ〳〵お娘、こりやどこまで連れていかんすのぢや。日は暮れる、幸ひ人のこぬ安達が原、此草村でついちよこ〳〵、祭の太鼓打ち仕舞はんと、いきつた撥の納めばがない。サア〳〵爰で」とはないきも、「オ、せはしな、まだ暮れきらぬ薄明り、誰ぞが見たら恥しい。袖の振合ふも他生の縁と、今來る道でお近付になり、此片遠所まで送つて貰うたお前、私が使に行く家も、もう爰ちつとの間、門口に待つて居て下さんせ。つい口上いうて出て戻る。其内には

暗うもなり、ハテどうなりとお前次第」と、跡は得いはず顔赤らめ、袖打覆ふおぼこ氣に、現ぬかして、「そんなら爰に待つて居る、必早う戻ろぞや」と、門にすつくりまつの木立、娘は内へ入り口の、戸を押明けて、「アイ今歸りましてござんす」と、いふに主が不興顔、「わしにもしらさず出あるいて、日の暮れるまでどこにはいつてござりました。大事の身を持ちながら、大膽な一人あるき、嗜ましやませ」とつこうども、如才ない氣を呑込んで、「サアわしもおまへにいうてからと思うたれど、又供の人雇のと、世話になるが氣の毒さに、沙汰なしにいて來たは、ソレ今のナ、御病人の御願やら、何やらかやらの神參り、重ねてからは斷つて參りませう、もう堪忍して下さんせ」と、斷聞いて心も折れ、「ハテ神參りとあれば何の否と申しませう、此樣にとがとがいふもお前のお爲、人に見られてはならぬ身の上。かういふ中も誰が見まいものでもない、早う奥へござりまして、何かに心を付けてナ、御合點か。用があるならつい此ばゝを呼ばしやりませ、必端近う出まいぞや。サア〳〵早う」に「あい〳〵」の、返事しながら表の樣子、主の耳へおくの間の、障子押明け入りにける。門には何にもしら鷺の、首程長う待ち草臥れ、うろ〳〵内を指覗けば、「誰ぢや、どこの人ぢや、小暗りにうさんらしい」「イヤ大事ない者、ちつと用があつて。めんような、もう出さうなものぢやが」「コレ〳〵そこな人、出さうなとは何が出さうな」

「ヤアノ、出さうなというたのは、もう月が出さうなといふ事ぢや」「ムヽ月の事か。そしてヤアうろ〳〵と、こなた何ぞ落したか、尋ぬるのなら火をともしてかしてやりましよ。ソレ幸の高燈籠、大儀ながらおろして下され」と、いひつゝ取出す火燧箱、こち〳〵打てばこて〳〵おろす、戀の闇路を照すとは、氣當りよしと心で悅び、又引上ぐる細引の、長い鼻毛で釣りかけた、娘はまだかと指覗き、「コレばさま、爰の内へたつた今、娘が一人來ましよがの」「チヽ來たが夫が何とした」「サア其娘に、もういなんか待つて居るというて下され」「ハヽヽヽいなんかとはどこへいなんか、ありや餘所の者ぢやない、こちの内の娘ぢやはいの」「ヤア、あの今來た娘は爰の内の娘かえ、なむ三しまうた」「ホウ氣疎なけな顏はいの。けふ氏神へ參つた戻りに、だれやら送つて貰うたというたが、ムヽ扨はこなたであつたの。是はまあ〳〵若い人ぢやが、奇特によう送つてやつて下さつた。遠道をあるいた草臥やら、もう奥にねて居ます、こなたもいんで休んで下され。ヤレ〳〵大儀でござつた」と、戸口をぴつしやり立て出され、物も得いはずむしやくしやと、にきびだらけな赤ら顏、ふくらかしてもせう事なく、「テモむごいめにあはしをつた。結構な釣者がかゝつたと思ひの外、あちらこちらへ釣られてのけた。エヽいま〳〵しいヽけたいの惡い娘め、どうするぞ覺えて居い」と、つぶやき〳〵立出でしが、

何思ひけん立歸り、裏の藪垣押分けかき分け忍び入るともしら糸の、籠にくりまく柴車、廻る月日の關の戸を、漸遁れ生駒夫婦、行く先とても定まらぬ、あてなし旅の行付次第、安達が原の高燈籠、心便にたどりつき、「コレ戀絹、若しも關所の追手がこうかと、氣のせく儘に日をくらし、とんと宿を借損うた。跡の村で聞いた、爰が彼安達が原、何と廣い野原ぢやないかいの」「ほんにまあ方角さへ知れぬ所、道に迷うたらどうせうと、案じてわたしや癪がいたい」「何の案じる事がある、氣遣ひ仕やんな。高燈籠があるからは家がなうては叶はぬ筈」と、邊見廻し「あるぞ〳〵、あれ〳〵あそこに火の光。こつちへおぢや」と戸口に立寄り、「案内しらぬ旅の者、足弱を連れ暮に及び難儀致す、一夜を明させ下さらば、上もなきお情」と、案内すれば老女は立出で、「夫はまあ〳〵おいとしや。殊に女中もあるさうなに、お泊りなされと申したけれど、氣の毒は問所も」「ア、申し〳〵、たとへ牛部屋灰部屋でも、一夜お泊め下さらば、生前の御厚恩」「ハテ不自由をお厭ひなされずば、成程お留め申しませう」「是は〳〵忝し」と、夫婦が悅び、杖草鞋、脚絆の紐もとく〳〵と、二人を誘ひ内に入る。「見ました所がお侍、どれからどれへのお出でぞや」と、尋ねに戀絹會釋して、「アイ私どもは都の者、はる〴〵と此國へ參つたは、幼い時に別れたる」「ア、これ〳〵女房、イヤ我々は當國松島一見の爲。夫は格別、時

ならぬ高燈籠はお國の風か、但しお志の常夜燈か」と、脇道へころばす氣轉、主は何の氣も付かず、「御尤のお尋ね、此所は安達が原と申して、山なり原なり道の知れぬ街道、ちやうどお前方の樣に道に迷うて難儀するが多い故、あの樣に燈籠を點し、往來の衆の助にするも、先立たれし連合の、未來の闇を照す明り」「是は〳〵限りもなき大功德」と、咄の中に戀絹が、旅の勞か苦しむ體、「コリヤ女房何とした」と、寄添ふ夫を力草、「どうした事やらきつうおなかが痛みます」と、聞いて惚り、「何ちや腹がいたい、サア〳〵事ぢや」とうろ付く夫、「コレ申し、何をマア其樣に、腹の痛むは旅勞、水のかはりである事」と、落付く主氣のせく生鵜、「イエイエイエそんな事ぢやござりませぬ、何を隱さう女房は、此月が臨月でござります。大方其氣が付いたもの」「ヤア何ぢや、此月が產月ぢや、アノ此女中が、ハテ扨夫は」と心の工面。夫はあわて立つたり居たり、「コレ申し、どこぞ爰らに餅やがあるなら、取上ばゝを味噌汁で、焚いて喰はして下さりませ」と、何をいふやらうろ〳〵きよろ〳〵。「マア〳〵お前方も、こほれかゝつた者を連れて旅するとは大膽な、ドレわしがおなかを見てやろ」と、懷へ手を差入れ、「イヤイヤまだ、今やちよつとの事ぢやない。此痛はつい直る」と、そろ〳〵胸を撫でさすれば、戀絹は心地よく、ほんにとんと痛が直りました、お前樣はお功者な」と、聞いて夫も落付く吐

息、「イヤあんまり落付くまい、何時の知れぬおなか」「したが道中の冷が入つて、心安うは出來ますまい。ア、何ぞよい藥を進ぜたいものぢやが。ヲ、幸なことがある、此野はづれの庄屋殿に、結構な安神散がある、ありや早めにもなる藥、わしがいて買うて來て進ぜたけれど、年寄つて夜道は叶はぬ、大儀ながらこな樣いて、というても道の案内知らずであろ、いつそわしと二人いて買うて來ませう。コレ女中、ちつとの間ぢや、留守してござれや。あの藥一ぷく呑むと心安うまめになる」「夫はまあ〳〵いかいお世話、生駒樣も御苦勞ながら、あなたと一所に」「おつと合點、我等は先へいこま之助」と、口合たら〳〵立上れば、老女も小づまかい取つて、「必氣遣ひな事はない程に、ちつとの間待つてござれ。わしが留主の中に奥の襖を明けまいぞ。サア〳〵ござれ」と打連れて、戸口へ出でしが立ちどまり、「コレ藥代がいるが、路銀は持つてか」「成程肌にござります」「おつとよし〳〵。コレ女中、かんまへて閨の内を、覗いてばし見やしやんな」と、念に念おす老の坂、道の助は生駒之助、伴ひてこそ出でて行く。跡には一人戀絹が、心細さに行燈の、火はかき立ててもかき曇る、空も物うき旅の宿。「ほんにまあ、人の行方と水の流程定らぬ物はない。都の者が陸奥三界、しかもやょまで產む樣になるといふは、アヽ思ひ廻せば女程、あぢきない者はない」と、打しをれしが、「アヽぐち〳〵、たとへ野の末

山の奥でも、かはい男と一所に居るが身の樂しみ、どうぞよい男の子を産んで、主の悦ばしやんす顔が早う見たい。したが若女の子など産んだら、機嫌が悪うはあるまいか。ア、儘よ、女子ぢやとて、まんざら捨てうともいはれまい、二つ取るならよい男の子を産んで、夫婦が中に添乳の枕、ねん〳〵ころゝん〳〵が、いうて見たい」と女氣は、それしやの果でもしどけなき。次第に更くる夜嵐の、身にしみ渡つて物凄き、安達が原の軒もる月。「エ、遲い事ではあるぞ、こんな廣い所にわし一人置いて、つい戻つてくれたがよい。ほんに今のかみ樣が、閨を覗いて見なというてどあつたが、ちよつと見ようか。イヤ〳〵何ぞこはい物でもあつたら悪い。ア又見たい物でもある」と、氣味悪ながらそろ〳〵と、障子開いて、「何やら白い物がある」と手に取つて、「ナウ悲しや髑髏ぢや」と、辷退く拍子に浮桶にばつたり。「ヤア爰にも又人の腕」と、氣も魂も消入る思ひ、がた〳〵震ひ漸〳〵と、表の方へ辷出づれば、後にすつくり白髪のばゝ、「申し〳〵、コレ申し」と、呼はる聲に又恟り、「イヤこはい者ぢやない、主のばゝでござるはいの」と、聞いて少しは人心地、「ほんにおまへはおかみ樣、いつの間にお歸りぞ。定めて主も一所であろ、ちやつと呼んで下さんせ」と、胸撫でおろすばかりなり。「イヤ連合はまだ跡に、こなたにちつと用があつて、ばゝ一人戻りました」「何ぢや連合はまだ跡にぢや、エヽ

又きり〳〵戻つてくれたがよい。手が出るやら、髑髏が出るやら、どうやら氣味の惡い内、どれ迎ひに」と、言捨て出づるを引きとゞめ、「其夫の戻られぬ先に、こなたにばゞが無心がある」「サア其無心といはしやんすは、路銀をかせといふのであろ。わしが肌にはないによつて、ちよつと夫を呼んで來て」「イヤ銀ばかりぢやない、路銀よりまだ外に、こなたの肌に付けた物がある、夫をばゞが貰ひたい」「ムヽ銀より外に、わしが肌に付けた物とは」「イヤ外の物ぢやない、こなたの腹な子がほしい」「ヲヽあのかみ樣とした事が、そんな事なら人をびく〳〵さゝんがよい。お前樣のお世話で、かたはでもない子を産んだら、其時はどうなりと」「イヤ産んだ子は役に立たぬ、まだ腹にある中を、子籠というて、大銀になる大妙藥。それで其子が貰ひたい」「エイ、あの胎内にある子を、どうしておまへ」「イヤ心安うとられる、つい其腹を裁割つて。ホヽヽヽ、あの子とした事が、何の夫を震ふ事で。ばゞがいたうないやうに、つい一思ひに殺してやる。よい子ぢや、爰へちやつとござれ」「アイ」「はて扨しぶとい、ござれいの」「すりやわたしを殺して」「ヲヽくどう。其藥がほしさに、とうから尋ねた孕女、世間に澤山にある物なれど、尋ぬる時は意路惡うない物いの。コレぐづ〳〵して隙入れて下さんな、きりきり殺してまた寺參りせにやならぬ。年寄は後生一ぺん、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と、と

なふる口は耳までさけ、安達が原の黑塚に、こもれる鬼といひつべし。戀絹あるにもあられぬ思ひ、「私を殺すとおつしやるも、銀からおこつた事なれば、路銀も殘らず上げませう。まだ其上に此衣類、はいでなりとも助けてたべ。つらい命をながらへて、陸奥までさまよふも、何とぞ安う産みたいばかり、よく〳〵深い緣なればこそ、わたしがおなかをかり初も、十月に及ぶやどり子に、せめて此世のあかりを見せ、一日なりとも親よ子と、互に呼びつ呼ばるゝまで、命が惜しい、死にともない。慈悲ぢや、情ぢや、コレ申し」と、取付き歎けど聞かぬ顏、「何やらいはしやるさうなが、年寄といふ者はの、コレ此耳が遠いはいの。ドレそろ〳〵やりかけう」と、小づま引上げ玉だすき、隙を窺ひ戀絹が、逃出づるを引戻し、懷劍逆手に取廻せば、何とせんかたなみだ聲、「アレ」「聲が高い」「サア〳〵それでも」「エヽ」息の根とめよと突つかくる、刃先をよけてもよけさせず、付けつまはしつ追ひ廻り、なんなく肩先切りこまれ、立つ足さへもたぢ〳〵、又突つかくる白刃の切先、兩手に握つて、「こりや是程いうても聞入れず、どうでもわしを殺しやるの。エヽこなたは、鬼かいの蛇かいの。死ぬる我身は因果とも因緣とも、あきらめても死なれうが、可愛や此子が、闇より闇に、迷うて母を尋ねうと、思へば悲しい死にとむない。何の因果で私が身に、やどつて來たぞ」と身をふるはし、もだえ歎くぞ道理なる。「エヽ七

めんどうなよまひ言」と、懐劍しごけば紅の、血汐に染る手を合せ、「どうぞお慈悲に、連合の歸られるまで。せめて名殘にたつた一目、逢うて死にたい、顔見たい」と、延びあがつて表の方、「生駒樣いなう。わしや今切られて死ぬはいの。我つまなう」と泣きさけぶ、聲さへいとど遠近の、空吹く風の音ばかり。「コリヤ世話やくないやい。其連合はな、方角知れぬ山中へ、突放して戻つたれば、今時分は、猪や狼に喰殺されてをるであろ。其跡へ廻つて、路銀はこつちへしてやるのぢや、何とようしたものか。夫に逢ひたか、早う冥土へやつてやろ」と、たぶさ摑んで肝のたばね、指通されて七顚八倒、苦しむ體はくる〳〵〳〵、輪乘のごとく打ちまたがり、乳の下より十文字に、腹裁破る有樣は、目も當てられずむごらしき。斯うとも知らず生駒之助、山道に踏迷ひ、漸〳〵歸る表口、戸をほと〳〵とおとづるれば、内には恂り老女がはいまう、〻見付けられては一大事と、赤子の血汐を手つ取早く、用意の器に絞り込み、見廻す傍に以前の髑髏、「ハテあやしや、此しやれかうべにしみ込む血汐」と、不審は立てど氣はわくせき、女の首にかつたる、守り袋の紐引切り、一つに集め奥の方、指足してぞ忍び入る。表は猶も打ちたゝき、「女房ども戻つたぞや、戀絹々々〳〵」と、呼べどたゝけど音せぬは、ハテふしぎなとさし覗き、見れば血に染む女房の死骸、南無三寶と氣は半亂、門の戸踏明けかけ入つて、「ヤレ女房、何者が

手にかけしぞ、戀絹やい」と、いふかひさらになきがらを、抱上げて立つたり居たり、「エ、遲かりし殘念々々。嘸我を待ちつらん、可愛の者やいぢらしや」と、前後なみだにくれけるが、泣く目をはらひ、疵口に心付き、「ム、腹をあばき、胎内の子まで手にかけしは、盜賊のわざとも見えず、何にもせよ此家のばゝ、我を出しぬき歸りし曲者、引つくゝつて詮議せん」と、裾はせをつて奥の方、主が寢屋とおぼしき一間、あひの戸襖踏みひらけば、内は朱玉をのべたる御殿、翠簾卷上げてたをやかに、打ちふし給ふ稚宮、傍に從ふ老の身も、賤の姿を引替へて、十二單に緋の袴、白髮額をさゞ髮や、敬ひかしづく有樣に、荒れし生駒もすゝみ兼ね、暫らくためらひ居たりしが、ちつとも臆せず大音上げ、「ヤア體に綾羅はまとへども、禽獸に等しき狸ばば、妻の敵子の敵、覺えがあらう覺悟せよ」と、詰寄ればはつたと睨め、忝くも當今の弟君、環の宮の玉座間近く尾籠の振舞。かくいふ我は奥州六郡の司、安部の太夫頼時が妻。情なくも我夫を八幡太郎に亡され、無念の月日を送る中、成長したる貞任宗任、環の宮を奪取りしは、奥州の内裏と仰ぎ、諸人をなづける謀叛の根ざし、いかなれば此君、我國へ下向の時より、物いひ給ふ事叶はず、一天の君として、かゝる難病世の嘲り、とやせんかくやと醫術さまゞ。昔漢の世に或人此病を煩ふ、名付けて止聲病といふ、其頃耆婆が祕密の家方、孕める女の腹を裁

ち、胎内の子の血汐を用ひて立所に平癒す。我是を行はんと、普く産婦を尋ぬる所に、今日思はず汝が女房、天子のお役に立つたるこそ、類稀なる身の冥加、夫のみならず人を殺し、金銀衣服を奪ひしも、皆軍用の助の爲」と、始終を聞いて驚く生駒、「ム、貞任の母儀とあるからは、手にかけられし女が爲にも」「ホ、則ち母といふ事か」「サア然らば娘と存知の上」「イヤ知らぬ、娘と知つたはたつた今、無念のさいごをとげられし、夫頼時の魂魄を、いますがごとく此日比、祭置きたる髑髏に、女の血汐しみ込みしは、親子の血筋疑ひなしと、捜見れば此守に、吾家の系圖書、扨こそ知つたる娘が身の上、往時の敗軍に、親子兄弟ちり〳〵になりし時、乳母に抱かれ別れし後は、都九條へ賣られしと聞きつれど、尋ねとふべきいとまもなく、打捨て置きしが彼等が仕合、思はずしらず我娘が、君の病ひの薬となるは、手柄者とも果報とも、此上のあるべきか。でかしをつたととてもなら、譽めてやつて殺さうもの、何にも知らず死にをつたが、たつた一つ残念な」と、鏡のやうなる両眼に、こたゆる涙はら〳〵、實も貞任宗任を、産落したる骨柄なり。生駒之助感じ入り、「女に稀なる大丈夫、さりながら、玉簾深き若宮を、いかゞして奪はれしぞ」「ヲ、それこそ宮の御乳母、匣の内侍を頼み、密に御所を立ちのかせし。いざ匣殿、此御薬を宮様へ、とく〳〵すゝめ申されよ」と、呼出せば一間より、賤の姿を其儘

に、立出で給ふ匣の内侍、「ヲヽ、それこそ待兼ねし、宮樣の御爲には、親とも姉とも、譬ん方なき老女の情、二十日餘りの月かげを、移して用ゆる此藥法、いで御藥を奉らん」と、空にさえ行く月かげを、寫し取るよと見えけるが、何とかしけん、器ばつたり谷底へ、落ちて血汐に染めなす岩角。こはそもいかにと驚きながら、見下す谷の岩間より、俄にうづまく水のあし、淸々滔々とわき上れば、内侍は水氣に目も放さず、守り詰めて「あら不思議や、今産婦の惡血谷底にしたゝれば、忽谷水逆まき上つて、土中の穢を淸むる事、誠や水晶はちりを受けず、蓮葉は泥に汚れず、か程奇瑞を顯はすは、正しう尋ぬる十握の御劍、此巖中に隱しあるに疑ひなし。ハヤ、有難や、忝なや」と、女姿もいつしかに、引きかはつたる變生男子、眉逆立つて目の内も、威有つて猛き其有樣。老女はたけつてうなり聲、「すりや匣の内侍と僞りしは、寶劍詮議の方便よな」「ホヽ、御劍失せさせ給ひしは、汝等親子が業ならんと、内通の心を見せ、義家が一子八若をもつて環の宮と僞り、女姿とさまをかへ、付添ひ來りし某は、八幡太郎義家が末弟、新羅三郎義光」と、はじめて名乘る武將の系圖、さすがの岩手も驚きに、只惘然たるばかりなり。生駒之助すゝみ寄り、「君は稚き時よりも、他家にて育ち給ひし故、かく申す某まで、御顏見しらぬ幸に、驚入つたる御方便、不審なるは其御種、物いひ給はぬ病とは」「ヲヽそ

れこそは稚者に、何事ありとも物いふな、事顯はれては一大事と、いひ含めたる止聲病。今日寶劍の有所知れたるも、汝が妻が死したる故。莫大の功なれば、兄にかはつて勘當赦し、元のごとく主從ぞ」と、情の詞に生駒が悅び、はつとひれふすばかりなり。岩手は無念のぢだんだ踏み、「エ、口惜しや腹立ちや。現在娘を殺すといひ、是まで心を盡せしも、皆むだ事であつたよな。よし此上は何とせん、敵の片われ其ちつぺい、ひねり殺して冥土の供に、つれんずもの」と立上る。「さうはさせぬ」とさゝゆる生駒、振切る袂とどむる袖、「放せ」「放さじ」もみあふ後の襖を踏明け、「鎌倉の權五郎景政、とくより是に守護致す」と、呼はり出でしは以前の前髮、肌は小具足小手脛當、八若抱き突立つて、「若君の仰を請け、岩手といふおばゝを釣りに、此國へ入りこんだは、かういふ時の後詰の役人。叶はぬ修羅くら燃やさずとも、寶劍出し降參せよ」と、聞くより猶も無念の齒がみ、「是までなり」とし刃の切先、腹に突立てどつかとすわり、「とても叶はぬわが運命、かゝる方便のありとも知らず、夫の敵國の仇、子供に討たして高名させんと、我慢に凝つて邪非道、人を人とも思はぬ天罰、忽報うて血を分けし、娘を親がなぶり殺し、嘸や苦しかりつらん。地獄畜生餓鬼修羅道、其苦しみを身一つに、うけし因果を斷切つて、冥土の旅でいひ譯せん。娘よ孫よしばらく待て」と、突こむ劍を口にくはへ、緣先よりまつ

逆さま、落ちてはかなくなりにける。新羅三郎すゝみ立ち、「寶劍は此谷底、某向つて守り奉らん。兩人外面に氣を付けよ」と、いひ捨て谷へ飛びこめば、下に伏せたる隱し勢、挑燈松明振立てく、遁さじやらじと　三重　いどみあふ。谷には新羅、上には兩人、投げおろしたる大木大石、壓にうたれてあまたの人數、微塵になつて死してげり。猶もためらふ山かげより、「安倍の貞任是にあり、見參せん」と呼はつて、寶劍携へしづく立出で、「かゝる術もあらんかと、母にも知らさず付け置く番人、手向ひせしは彼等が役目。弟宗任を助けし義家、敵に恩を受けながら、軍せんも心よからず。さるによつて此御寶、只今渡すは宗任が命の返禮。再會は戰場と、義家に傳へよ」と、寶劍渡し傍なる、母の死骸を抱き上げ、「不孝の悴遲參の誤り、やみく生害させませし、殘念至極」と物數を、いはねど籠る千萬無量、新羅三郎感じ入り、「敵ながらも適勇士、辭退申さぬ。寶劍の納る所は戰場々々。先夫まではおさらば」と、寶劍携へ「ヤアヤア生駒、老女の作れる罪科も、高燈籠の光にあり、其火を消すは汝が手向」と、仰にはつと立寄つて、松の立木を切倒せば、法の光も消失せて、忽しゆらの太鼓鐘、相圖に寄せくる數萬の軍勢。「すは事こそ」と權五郎、生駒も谷へおり立てば、「ヤアく騷がれなかたく、高燈籠は此家の狼煙、消ゆると集る手筈の軍兵、人々の警固して、八幡太郎の陣屋まで、つゝがなく

送り屆けよ」と、寛仁大度の詞にはつと諸軍勢、四方を圍む歸國の供、冥土の供はなき母の、死骸を抱く貞任が、胸は麻杵とかき亂す、糸の亂の苦しさを、こたへる涙はら〳〵に、衣のたてはほころびて、裾や袂と別るゝ道、勇むは新羅、權五郎、生駒が背におひの殿、老いぞ籠りし此の原を、鬼籠れりと讀みなせし、安達が原の黑塚の、其古事を末の代に、語り傳へて殘しける。

第五

深きを以て淺きに入り、淺きを以て深きを知る、其源や武將の大度、八幡太郎義家公、貞任が籠りたる小松が柵に押寄せらる。附從ふ輩には、舍弟新羅三郎義光、鎌倉の權五郎景政、其外一騎當千の、鎧の袖も白旗も、風に靡いてめざましき。景政御前に兩手をつき、「兩將には暫く木蔭に御屯」と、勸め立てたる折も折、どつと寄手の鯨波、景政きつと見、「ヤアちよこざいなる蠅虫めら、一所にかゝれ」と大手をひろげ、當るを幸ばら〳〵、さながら秋の木の葉武者、勇氣に恐れて軍勢ども、「叶はぬ、赦せ」と逃げ行くを、遁さじやらじと追うて行く。引違へて陣頭に、躍出でたる安倍の宗任、「新羅三郎是にあり、望む所の宗任め、惡事のかたま

り打碎かん」と、ぐつと引きぬく並木の松、微塵になれと打ちかくる。「コリヤ〳〵」とねぢ合ふ強力、とどまる勇力。いづくよりかはしら羽の矢先、一人の胸板、はつと驚く間もなく、貞任義家東西より立出で給ひ、「ホ、珍らしや貞任、汝命の恩を忘れず、三種の神器を別條なく此方へ渡し、宸襟を休め奉る上からは、義家が首取つて、頼時が冥土の妄執はらせよ」と、さも潔くのたまへば、はつと二人は頭を下げ、「ハアッありがたき御一言、日比の恨」と貞任が、つゝ立上つて鞘ぐちに、はつしと兜を打落し、抜くより早く我と我、右手の小脇にぐつと突立て、大將の前にどつかとすわり、「三十年來父の敵、討たうと思ふ鐵石心、義家公の御恵に、忽とろけし此上は、弟の宗任を、御家來となし下さらば、生前死後の面目」と、苦しき中にも弟を思ふ、眞實しんみの血の涙、大將不便と思召し、「いかに宗任、心を改め我幕下に從ひ、安倍の家を引起せ」と、恵も厚き御詞、「今こそ願ひ達せし貞任、いづれもさらば」と勇氣の最期。又も聞ゆる鐘太鼓、敵にはあらで鎌倉の權五郎、瓜割四郎を提出で、「主君に敵對ふのら猫め、是喰うて死ね」と打付くる。引つぱづして逃行くを、襟がみ摑んで宗任が、ぐつと一しめ忠義の手始。かゝる所へ匣の内侍、宮を誘ひ生駒之助、維時を高手に縛め御前に引居ゑ、「謀叛の張本大江の維時、宮を奪取り此國へ落下る、半途に出合ひ斯の通り」と、詞の下に一

太刀づつ、朝敵亡びて源氏の勝鬨、早凱陣とおだやかに、國も治る君が代の、夜に增し日に增し繁昌は、源氏と壽けり。

奥州安達原終